

# 天王平遺跡発掘調査報告

— 第4・5・6次調査 —

多度町教育委員会

2003年3月



4次調査遠景



# 刊行のことば

多度町は三重県の最北部に位置し、岐阜県と接し木曾三川を渡れば愛知県となります。古代より交通の要所として、多くの人々がここを居住地とし、また先にある目的地に向けて通過していったことでしょう。そして、多度大社が鎮座し、信仰の場としても重要な場所でした。濃尾平野のどこからでも見ることができる多度山をご神体としており、多度神宮寺伽藍縁起并資財帳には「神坐山」と出て参ります。この地域のシンボルの一つであったと言えるでしょう。木曾三川を下ってくる人々も、養老山系を右に見て、その切れ目となる南端の多度山を目印に、船を進めたことでしょう。

天王平遺跡は、その歴史深い多度においても特に重要な遺跡の一つです。これまでも多くの竪穴住居・掘立柱建物跡が見つかっています。今回報告される資料によって、天王平遺跡、そして多度の歴史の一片が紐解かれることでしょう。

平成 15 年 3 月

多度町教育委員会

教育長 横井 清英

# 例 言

- 1 本書は、桑名郡多度町大字小山字天王平に所在する、天王平遺跡の発掘調査報告書である。  
今回は、第4次から第6次調査の成果を合わせて報告するものである。これまでに天王平遺跡の発掘調査は、県教育委員会が2回、町教育委員会が2回行っている。本来ならば、町の報告としては第3次～第5次調査となるが、町の第2回目の調査に際して、県の調査を受けて第3次調査として報告を行っているため、第4次～6次調査として報告する。町の1回目の調査については、便宜的に0次調査と表記する。
- 2 調査の期間・原因・体制は、以下の如くである。(肩書きは調査当時)  
第4次調査 期間 平成9年6月7日～10月15日  
原因 町道小山・多度駅線新設工事  
体制 調査主体 多度町教育委員会  
調査担当 加藤真琴(多度町教育委員会)  
調査補助 石神教親(愛知学院大学大学院院生)  
調査指導 尾野善裕(京都国立博物館)  
調査参加 川口昌代・小林清正・小林重男・磯貝貞夫・稲垣彰久・水谷晃・  
加藤やす子・水谷裕子・北村久子・和田京子・石川誠子・岡本秀子・  
渡部洋士  
  
第5次調査 期間 平成12年3月22日～29日  
原因 町道小山線改良工事  
体制 調査主体 多度町教育委員会  
調査担当 石神教親(多度町教育委員会)  
調査参加 松田繁(花園大学学生)・大橋寛幸・水野義隆・佐野梓(愛知学院  
大学学生)・木村けい子・伊藤夏子・北村久子・石川誠子・竹谷由  
起子  
  
第6次調査 期間 平成12年11月15日～平成13年1月4日  
原因 町道小山・多度駅線新設工事(4次調査の続き区間)  
体制 調査主体 多度町教育委員会  
調査担当 石神教親(多度町教育委員会)  
松田繁( )  
調査指導 尾野善裕(京都国立博物館)  
調査参加 小林重男・石田忠久・平野紘一・平野和子・岡本秀子・石川誠子・  
北村久子
- 3 調査にかかる費用は、多度町が負担した。

- 4 出土遺物の整理・報告書作成業務は、平成 14 年度に行い石神教親・松田繁が担当した。執筆の担当は章末に記した。
- 5 調査にあたっては、多度町建設課・葛西組・石川組・小山区・加藤貢氏の協力を得た。
- 6 発掘調査後の地形測量は、株式会社イビソクに委託した。
- 7 調査および整理・報告書作成にあたっては、下記の方々にご指導・ご教示を賜った。記して感謝を申し上げる所である。(敬称略、順不同)  
 岡田登(皇學館大学)、上村安生(三重県史編さん室)、森泰通(豊田市)、水橋公恵(斎宮歴史博物館)、斎藤理・平野亜紀(桑名市教育委員会)
- 8 遺物実測図は、3分の1の縮尺に統一したが、それと異なるものについては個々に表記した。また、遺物の名称については、椀・碗・鉢を椀に、坏・杯を杯に統一した。
- 9 本書で使用している記号は以下のとおりである。  
 SB 掘立柱建物 SD 溝 SH 竪穴住居 SK 土壇 SX 土壇墓  
 SZ その他
- 10 本書では、遺物の年代観を示すにあたり尾野善裕氏の猿投窯編年を参考としている。猿投窯編年の年代は、以下のとおりである。

期	I			II			III			IV			V			VI		
段階	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新
西暦	470	500	530	560	590	620	650	680	710	740	770	800	830	860	890	920		

- 11 調査に関する記録類および出土遺物は、多度町教育委員会で管理・保管している。

# 本文目次

## 第1章 位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

## 第2章 第4次調査

第1節 調査区と層位	6
第2節 遺構	6
第3節 遺物	14

## 第3章 第5次調査

第1節 調査区と層位	38
第2節 遺構	38
第3節 遺物	38

## 第4章 第6次調査

第1節 調査区と層位	39
第2節 遺構	39
第3節 遺物	39

## 第5章 結語

第1節 遺構について	47
第2節 遺物について	47

# 図 目 次

図1	多度町位置図……………	1	図15	4次調査S X01遺物出土状況……………	23
図2	周辺遺跡図……………	2	図16	4次調査S X01遺物出土状況模式図…	23
図3	調査区位置図……………	5	図17	4次調査出土遺物実測図(1)……………	24
図4	4次調査調査区平面図(グリット配置図)…	7	図18	4次調査出土遺物実測図(2)……………	25
図5	4次調査断面図(1)……………	10	図19	4次調査出土遺物実測図(3)……………	26
図6	4次調査断面図(2)……………	11	図20	4次調査出土遺物実測図(4)……………	30
図7	4次調査S H01平面・断面図……………	13	図21	4次調査出土遺物実測図(5)……………	31
図8	4次調査S H02～04平面・断面図……………	13	図22	4次調査出土遺物実測図(6)……………	32
図9	4次調査S H02カマド平面・断面図…	13	図23	5次調査調査区平面・断面図……………	38
図10	4次調査S H05・S B01平面図……………	15	図24	5次調査ピット平面・断面図……………	38
図11	4次調査S D03・04平面・断面図……………	16	図25	6次調査調査区平面図・断面図……………	42
図12	4次調査S K平面・断面図(1)……………	23	図26	6次調査S K01・S D02平面・断面図…	42
図13	4次調査S K平面・断面図(2)……………	23	図27	6次調査出土遺物実測図(1)……………	43
図14	4次調査S H05遺物出土状況……………	24	図28	6次調査出土遺物実測図(2)……………	44

# 表 目 次

表1	4次調査出土遺物計測表(1)……………	33	表5	4次調査出土遺物計測表(5)……………	37
表2	4次調査出土遺物計測表(2)……………	34	表6	6次調査出土遺物計測表(1)……………	45
表3	4次調査出土遺物計測表(3)……………	35	表7	6次調査出土遺物計測表(2)……………	46
表4	4次調査出土遺物計測表(4)……………	36	表8	三重県内移動式カマド出土遺跡一覧表…	49

# 写 真 図 版

図版1	4次調査S H01遠景 4次調査S H02遠景	図版5	4次調査出土遺物(1)
図版2	4次調査S H05遠景 4次調査S B01遠景	図版6	4次調査出土遺物(2)
図版3	4次調査S H02遺物出土状況 4次調査S H05遺物出土状況 4次調査S X01遺物出土状況	図版7	5次調査区全景 6次調査区近景
図版4	4次調査S X01出土遺物	図版8	6次調査東トレンチ 6次調査西トレンチ 6次S K02内高杯出土状況
		図版9	6次調査出土遺物



# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

多度町は、三重県の北端に位置し、岐阜県と接する。周囲を桑名市・長島町・東員町・員弁町・北勢町・岐阜県南濃町・海津町の1市6町に囲まれている。

養老山地<sup>①</sup>南端部に位置する多度山（標高403m）は、濃尾平野のほとんどの場所から望むことができ、地域のシンボリックな山であったと思われ、多度大社はその山をご神体として成立したと考えられる。

養老山地は、東側を走る養老断層の活発な活動によって形成された。断層は、西側を隆起させ東側を沈降させている。木曾三川が西に集中して流れる理由もそこにある。多度町のある山地の南側と員弁郡のある西側は、東側に比べ緩やかに傾斜し対照的である。これは、隆起した山地が地殻変動などの原因により崩落して形成されたもので、傾動地塊と呼ばれる。

天王平遺跡がある丘陵部は小山丘陵と呼ばれ、養老山地から源を発する多度川と肱江川に挟まれ、標高は30～100mほどである。北側は、多度川によって削られて急傾斜となり、南側は扇状地が形成され、集落が存在する。遺跡がある東側は、緩やかに傾斜し東端は段丘崖となっている。丘陵の東側は、多度川右岸が扇状地となっており、その南は低地となり、水田がひろがる。

## 第2節 歴史的環境

多度町内の旧石器時代に属する遺跡は、非常に少ない。小山丘陵の西側に位置する寺山遺跡からはナイフ形石器が見つかり、多度B遺跡では角錐状石器が見つかり、その他、柚井・関東遺跡でもこの時期の石器が見つかり、

縄文時代は、柚井遺跡・天王平遺跡・寺山遺跡・一ノ谷B遺跡・多度A・B遺跡など数ヶ所の遺跡で遺物が見つかり、遺構は今のところ確認されておらず不明な点が多い。弥生時代については、一ノ谷A・柚井・関東・多度B・東谷通・林崎・藤塚遺跡で遺物が少量採集されているのみである<sup>②</sup>。

古墳時代に入ると、古墳が多数造営され、現在までに38基が確認されている。そのほとんどが、開墾などにより滅失している。その中で、横山古墳1号墳は前方後円墳と考えられており、淡輪系を含む円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（馬・人物）、そして鉄刀も見つかり、町内の他の古墳とは卓越する内容である。これにより、この地の中心となる勢力が存在したと見ることができる。そして、その後一ノ谷古墳群・大久保古墳群などの群集墳が造られたと思われる。これらの、古墳群はほとんどが調査されていないため詳細は不明であるが、大久保古墳群の1基だけが昭和37年4月に調査がされ、胴張り形の横穴式石室を持つ円墳であったことが分かっている。また、南小山廃寺は古墳を削平しており、周溝と思われる溝が検出されている。この時期の集落については、明確な遺構が検出されていないため不明であるが、天王平遺跡0次調査<sup>③</sup>では台付甕などが出土している。

飛鳥時代、全国各地で寺院が建立されるようになると、町内でも南小山廃寺・北小山廃寺が造られる。両遺跡とも小山丘陵に立地し、北小山廃寺は天王平遺跡の中にある。南小山廃寺は、戦前から瓦や鴟尾



図1 多度町位置図

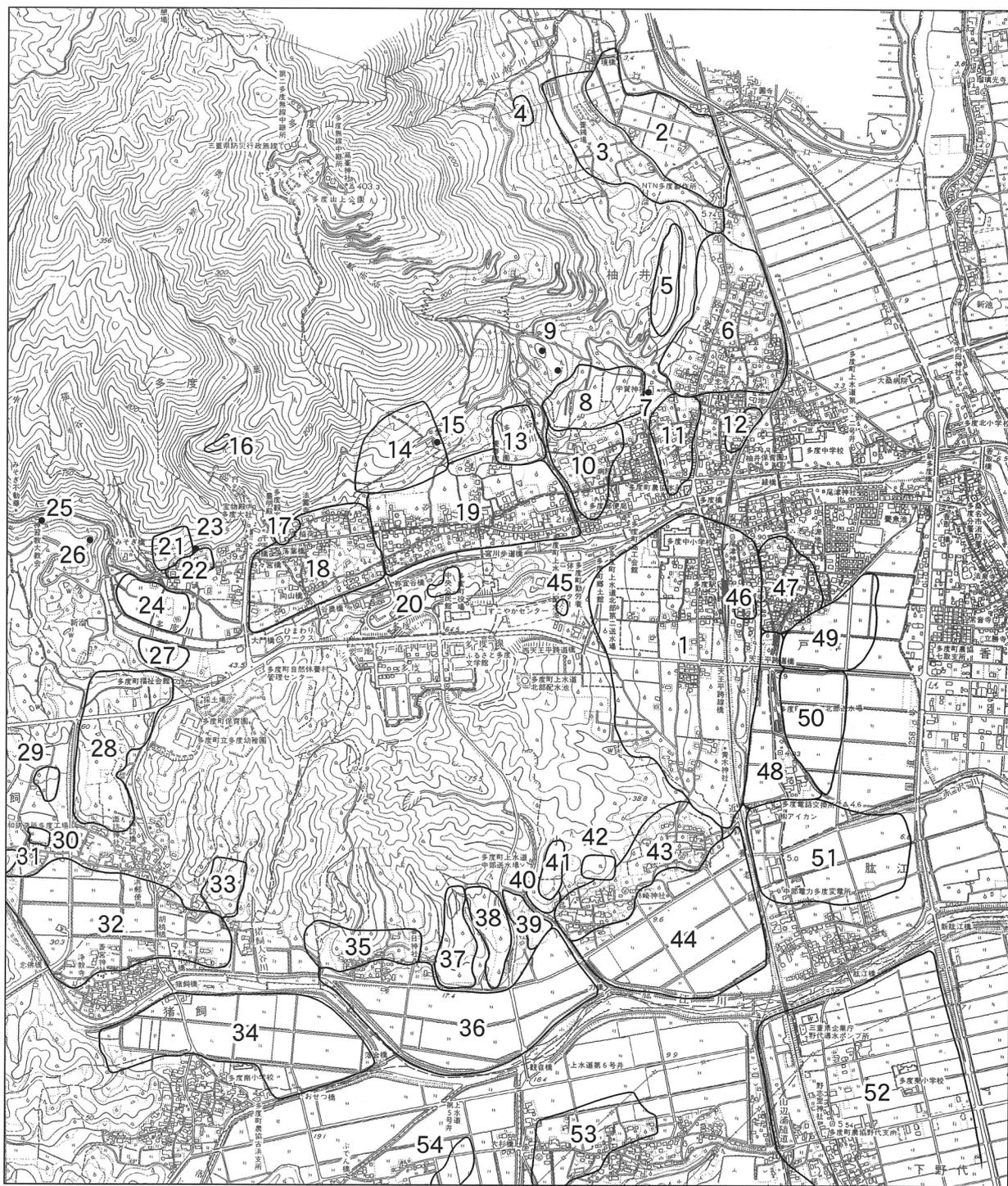


図2 周辺遺跡図 (S:1/20000)

- 1天王平遺跡 2袖井遺跡 3一ノ谷A遺跡(一ノ谷経塚・中近世墓群含む) 4一ノ谷B遺跡(3・4内に一ノ谷古墳群)  
 5一ノ谷C遺跡(横山古墳群含む) 6関東遺跡 7宇賀神社古墳群 8長尾遺跡 9長尾古墳群 10宇賀A遺跡 11宇賀  
 B遺跡 12宇賀C遺跡 13袖井城跡 14愛宕中世古墳群 15西城古墳 16多度経塚 17多度神宮寺 18多度A遺跡  
 19多度B遺跡 20衾宜谷中世墓群 21猫ヶ谷遺跡 22朝拝下遺跡 23宮地中世墓群 24八壺口遺跡 25八壺谷経  
 塚 26八壺谷古墳・古墓 27西野遺跡 28寺山遺跡 29北猪飼A遺跡 30北猪飼B遺跡 31西之河原遺跡 32西田  
 面遺跡 33猪飼城跡 34砂田遺跡 35大久保遺跡・古墳群 36宮前遺跡 37中ノ谷遺跡 38南小山麿寺 39西谷通  
 遺跡 40西谷通古墓 41貝殻谷遺跡 42小山城跡 43東谷通遺跡 44林崎遺跡 45西天王平遺跡 46北小山麿寺  
 47尾津森遺跡 48馬場遺跡 49森下遺跡 50藤塚遺跡 51石坪遺跡 52下野代遺跡 53石原遺跡 54星鳥遺跡

が見つかり、昭和60年の発掘調査によって単弁・素弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦が出土している<sup>④</sup>。寺院が、いつごろまで存続したかは不明であるが、調査では11世紀ごろまでの遺物が出土している<sup>⑤</sup>。

奈良時代には、多度神宮寺が建立され、その詳細については、延暦7年(788)に作成された『神宮寺伽藍縁起并資財帳』(重要文化財)に記録されており、二基の三重塔をはじめ多くの僧坊や附属の建物があつたことが知られる。多くは、檜皮葺・板葺・草葺の建物であつたが、西塔だけが瓦葺であり、これは宝亀元年(780)に賢環によって造営されたものと考えられる。創建当時のものと思われる瓦は1点だけだが、尾張国分寺式瓦が見つかり、資財帳には、尾張・美濃・伊勢・志摩の人々が神宮寺造営に関わつたことが記されており、広くこれらの地域における信仰の中心であつたことが窺える。天王平遺跡では、これまでの調査で奈良・平安時代の竪穴住居が多数検出されている<sup>⑥</sup>。

多度の歴史で注目しておかなければならないのが、古来より重要な交通の拠点であつたことである。それは、倭姫命の皇大神宮鎮座の地を求めての巡幸や、日本武尊(倭建命)の伝承などに見ることができる。倭姫命が天照大神を奉じて大和国から巡幸の途中、美濃国伊久良賀波宮(岐阜県巣南町)から遷り4年間留まつたとされる桑名野代官が、下野代にある野志里神社であつたとされる。また、日本武尊(倭建命)が東国遠征の際にとどまり剣を忘れた尾津浜(尾津崎)が、現在の御衣野付近と考えられている(戸津付近という説もある)。日本武尊は、東国からの帰途に伊吹山で傷つき能褒野に向かう途上でふたたび尾津を訪れ忘れた刀を見つけ、「尾張に直に向へる 一つ松あはれ 一つ松 人にありせば 衣著せましを 太刀佩けましを」と感激して歌を詠んだとされている。

これらの話は伝承であり、史実ではない。しかし、両者に共通するのは美濃国から伊勢国へのルートとして養老山地沿いを通っていることである。これは、古くからこのルートを使って人々が往来していたことを示すものである。これらの伝承とは逆に伊勢から美濃へ行程を経たのが、壬申の乱の時の天武天皇

と藤原広嗣の乱の時に伊勢に行幸した聖武天皇である。天武天皇が滞在した桑名郡家と、聖武天皇の桑名郡石占頓宮が多度町域であつたとする説もあり、天王平という地名は天武天皇が訪れたことに由来する伝承が地元には残されている。

美濃国との関係で、もう一つ取り上げなければならないのが、柚井遺跡出土の木簡である。ここからは「櫻樹郷守部春□□□粃一斛」「櫻樹郷□頭守部頽代粃一石□五百□」と記された木簡が出土している。櫻樹郷は、美濃国石津郡の郷名である。この木簡は、日本で最初に見つかった木簡であり、学史上貴重であることから県指定文化財に指定されている。柚井遺跡からは、この他100点を超える墨書土器が出土し「太富」「大善」「加福」といった吉祥句が記され、斎串や下駄といった数多くの木製品、和鏡、長年大宝なども出土しており、祭祀に関わる遺跡と考えられている。また、墨書土器に「津(湊)」と記されたものがあり、この地が古代の港であつたことが推定される。

また、古代東海道の榎撫駅があつたのも戸津のあたりと考えられている。榎撫駅の初見は『日本後紀』延暦24年(805)11月7日条で、『同』弘仁3年5月8日条には「今自桑名郡榎撫駅。達尾張国。既是水路。」とあり、ここからは船での行程であつた。日本武尊の伝説も残るように、多度が尾張国へと渡る重要な位置にあつたことがわかる。

そして、港の機能の中心は中世になると桑名へと移る。これは河川の沖積作用によって、徐々に陸地化が進み、海岸線が後退したことが原因と考えられる。そのため、香取荘・野代荘・富津御厨などが成立し、人々の生活の場も沖積平野へと変わっていく。そして、小山丘陵の東側には、馬場・藤塚・森下・尾津森遺跡があり、中世陶磁器が多く採集されている。それまでの天王平遺跡・南小山廃寺など丘陵部の遺跡では、11世紀ごろを最後に、ほとんど遺構・遺物が見られなくなるのと対照的である。

この時期の様子を知るのに役立つのが、近衛家文書「益田荘官某申状」と大井家文書である。宝治2年(1248)の「益田荘官某申状」は、多度町域にあつた香取荘と桑名市にあつた益田荘との境界に関する争いについての史料であり、これによれば、

木曾三川の河口部にできた中州の領有をめぐって、両者は応徳2年(1085)以来150年以上にわたって争いを繰り返している。その原因としては、地震や木曾三川の流路変更があるが、すでに陸地化していることが見て取れる。大井家文書の弘安元年(1278)「大井蓮実讓状案」に「鹿取(香取)荘内上郷地頭職」とあり、この上郷は現在の多度町上之郷と考えられる。また、上之郷揖斐川遺跡からは、11～13世紀の遺物を中心として多数の遺物が採集されており、史料との関連が指摘される。

この他、中世の遺跡では多くの中世墓群がみられる。宮地中世墓群からは、石室をともなった土葬墓が3基みつかり<sup>⑦</sup>、愛宕中世墓群・祢宜谷中世墓群では古瀬戸や常滑焼の蔵骨器が使用されている。また、愛宕中世墓群からは、多数の五輪塔・石仏もみつかり、往時は菰野町の杉谷中世墓群のように、石塔類が林立する景観であったと思われる。

経塚も町内では4箇所あり、その内、多度経塚からは、明和7年(1770)に銅鏡30面が発見され、重要文化財となっている。鏡以外にも、郷土史家であった伊東富太郎によって経筒外容器も採集されている。四日市市善教寺所蔵の「作善日記」(重要文化財)の嘉禎2年(1236)7月23日条に「多度の経の峰」と記されており、経塚との関係が指摘できる。

中世の寺院については、真福寺本「尾張国解文」が多度町内小山勝福寺で書写されたと記されており、この勝福寺を北小山廃寺に比定する見解もあるが、今のところ中世寺院に関する資料は見つかっていないため、明確ではない。一方、多度神宮寺は、連綿とその勢力を維持していたと思われ、小串家文書天文2年(1533)「多度山衆僧次第」によれば、多度山の麓に本寺・末寺合わせて70坊、僧侶300余輩という大勢力であった。室町時代の瓦が、多度大社東側の地から出土している

しかし、この大勢力も織田信長の北伊勢侵攻に際して、焼き討ちにあったと伝えられる。同様に、町内に存在する柚井城跡・小山城跡・猪飼城跡・御衣野城跡・大鳥居城跡も信長によって滅ぼされたとされている。御衣野遺跡はすでに滅失しているが、柚井・小山・猪飼城跡は現況をとどめている。大鳥居城跡は、これまで所在地不明であったが、『多度町

史』資料編1の編纂過程において、地籍図上で確認できることが分かった。

(石神教親)

#### 参考文献

- 多度町『多度町史』自然 1997年  
多度町『多度町史』民俗 2000年  
多度町『多度町史』資料編1 2002年

#### 注

- ①養老山地は、江戸時代までは多度山と総称されていた。東洋文庫所蔵『多度山図』には、現在の岐阜県養老町沢田から多度町までが描かれている。
- ②天王平遺跡の第3次調査では、弥生土器が1点報告されているが、『多度町史』資料編1での再整理の結果は須恵器の生焼けであると確認した。渡辺尚登『天王平遺跡発掘調査報告一第Ⅲ次調査一』多度町教育委員会 1993年
- ③例言参照。
- ④伊東春夫『南小山廃寺発掘調査報告書』多度町教育委員会 1986年
- ⑤天王平遺跡と同様、山茶碗が若干認められるが、量は頗る少ない。また、15・16世紀代の遺物が出土しているが、寺院に関わるものではなく、隣接する小山城跡などとの関連を考えるべきであろう。
- ⑥谷本鋭次『天王平遺跡発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1982年  
駒田利治『天王平遺跡発掘調査報告Ⅱ』三重県教育委員会 1983年
- ⑦竹内英昭・杉谷正樹『宮地中世墓群発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター 1997年



図3 調査区位置図

## 第2章 第4次調査

### 第1節 調査区と層位

4次調査は、町道小山・多度駅線の新設工事に伴い調査を行った。南側を通る主要地方道四日市・多度線の建設工事に際しては、県教育委員会によって二次にわたる調査が行われている。本調査区の南部分が、2次調査区にあたる。

天王平遺跡全体が西から東に向かって緩やかに傾斜する丘陵上にあり、本調査区も東に向かって傾斜し、西端が標高25.8mで東端が23.5mとなる。調査区北側に位置する多度駅の方へも緩やかに下っており、北端の標高は21.3mとなり、4次調査区内では最も低い。

天王平遺跡のこれまでの調査では、遺構面は一面しか検出されておらず、本調査でも同様の結果であった。表土（灰褐色粘質土層）の下に暗茶褐色粘質土層があり、ここからは多くの遺物が出土する。包含層の出土遺物として報告するものはこの層から出土した遺物である。遺構の埋土は、黒褐色粘質土層であったりするが、包含層と区別が付かない場合が多い。その下層は地山の橙褐色粘質土層となる。この橙褐色粘質土層の下にはほとんど同色でかなり大きな岩も含む礫層となる。従って、場所によっては遺構の埋土を除くと礫が剥き出しとなる。3次調査では、橙褐色粘質土層がほとんどなく、礫層に遺構が掘り込まれている所もある。

### 第2節 遺構

#### (1) 竪穴住居（SH）

天王平遺跡では、これまでの調査で58棟の竪穴住居が検出されている<sup>①</sup>。4次調査では、5棟の竪穴住居を検出した。

#### SH 01

調査区内、東西方向に長い区域のほぼ中央に位置する。北側は、調査区外に出るため全体の規模は不明である。東西38.0mで深さは0.16mほどである。住居内からは、いくつかのピットや土壌が検出されたが支柱穴は明確ではない。土壌SK05は、東西1.25m・南北0.92m・深さ0.2mである。造り付

けカマドは、東壁の南側に設けられており、これとは別に床面に焼け土が確認された。

出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・土製品・鉄製品などがある。住居内の土壌からも土師器が20点ほど確認されているが、その性格は不明である。

#### SH 02

SH 01の約6.5m西側に位置する。今回の調査で、唯一、全体の規模が把握できる竪穴住居である。東西4.65m・南北3.25mで、東西方向に長い長方形の平面型をなす。SH 03・04と重複する。造り付けカマドは、北壁中央やや東よりに設けられている。

出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器(?)がある。

#### SH 03

SH 02の西側に位置し、SH 02・04と重複する。南西角しか検出されていないため、全体の規模は不明である。住居内の施設について、西壁の部分で焼土が検出されており、カマドがあったと思われる。

（図5参照）

出土遺物は、土師器と須恵器がある。

#### SH 04

SH 02の北側で、大半は調査区外に延びる。当初は、溝ではないかと考えたが、底面が平坦に掘られており、角が隅丸の掘り方を持つことから、竪穴住居と判断した。検出されている部分の規模は、東西4.4mである。

重複しているSH 02・03・04の築造順序は、埋土による切り合い関係の把握が困難なため（本調査において、遺構の埋土のほとんどが暗茶褐色粘質土層一色のため、遺構の前後関係の区別が容易ではない）、はっきりしないが位置的な状況などを考慮し、SH 03→02→04の順に建て替えが行われたと思われる。

これまでに行われた調査においても、竪穴住居・掘立柱建物が重複した形で検出されており、竪穴住居では今回のように2回の建て替えが行われ、3棟が重複する例が二カ所ある。継続して住居が営まれ、長期にわたって居住していたことを物語るものであろう。

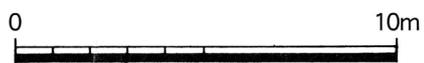
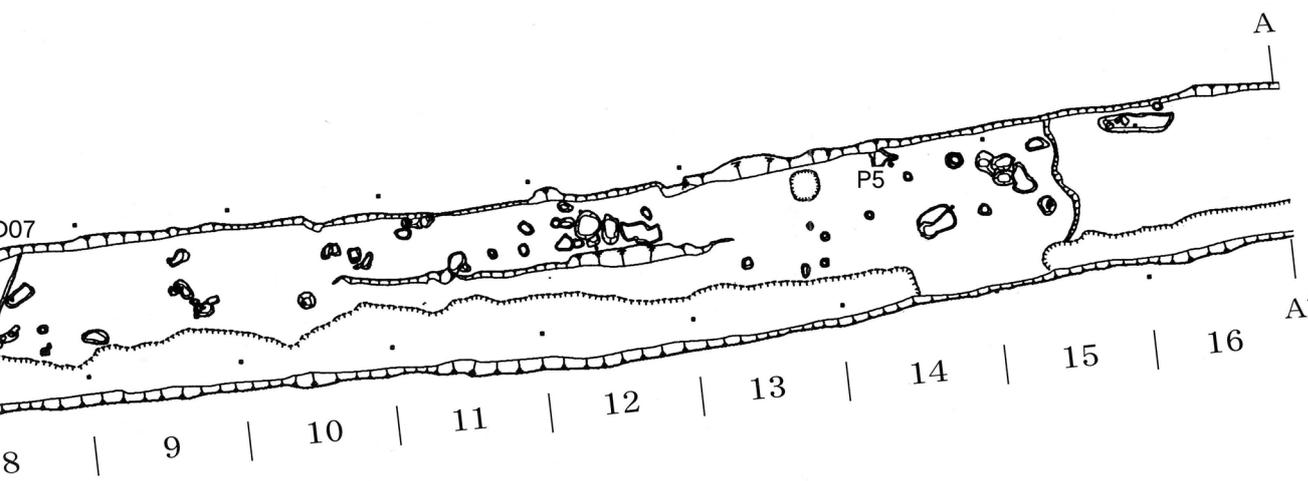
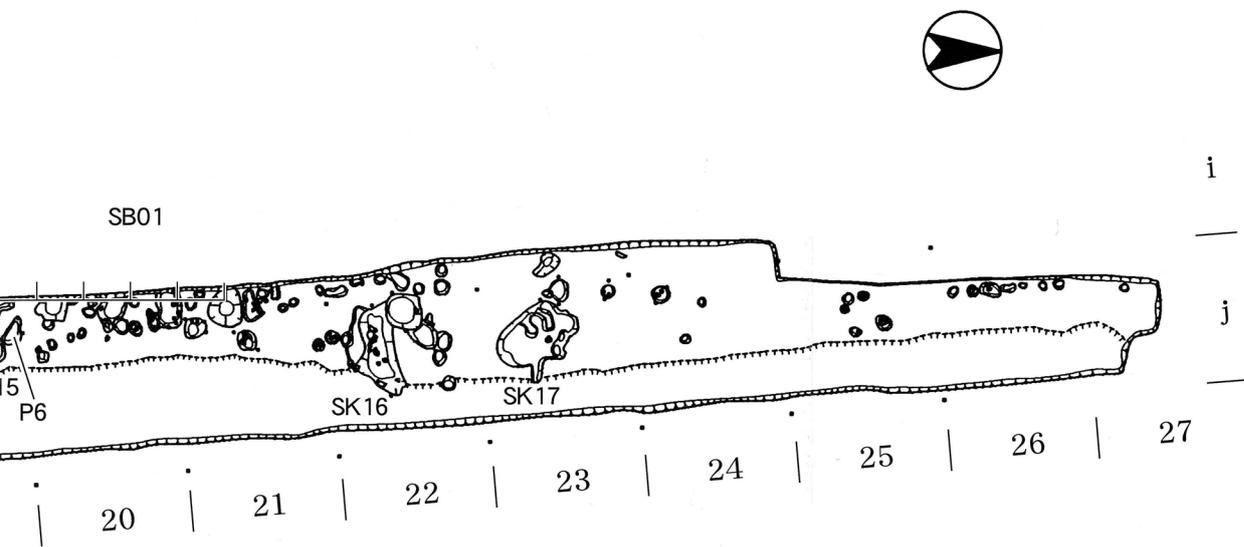
遺物は、土師器・須恵器が出土している。

#### SH 05

掘り方が、他の竪穴住居に比べ不鮮明であったた



図4 4次調査調査区



区平面図・グリッド配置図 (S=1/200)

め、検出時は性格不明の遺構と思われたが、掘削後床面に焼け土が見られること、方形に近い形となることなどから竪穴住居と考えられる。全体の規模については不明である。

遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗がある。床面直上からは、土師器の甑がほぼ1個体分まとまって出土している。

## (2) 掘立柱建物

### S B 01

5基の柱穴が並んで検出され、柱間（芯々間）が約1.5mである。柱列の軸は、N7°Eの向きである。調査区域の狭隘な部分であったため、建物の規模を確認できなかった。一番南の柱穴からは、断面で柱の抜き取り跡が確認できる。

今回の調査区では、1棟だけ確認されたが、これまでの調査では20棟確認されている。これらの建物内、南北軸がS B 01のようにやや東に傾いているもの(1°～13°)が13棟と圧倒的に多く、規則性をそこに見出し得よう。建て替えられたものも含むため、すべてが同じ時期に建っていたわけではないが、同じ向きに並んで建っている建物の一つであったとみることができる。

## (3) 溝

### S D 01

調査区西端にあり、長さ2m以上・最大幅0.95m・深さ0.1mほどである。調査区外にわたっているため、全形は不明であり土壌の可能性もある。土師器・灰釉陶器碗が出土している。

### S D 02

S H 01の西側で、東西方向の溝である。途中をピットで切られているが、元は一本の溝であったと思われる。長さ5.1m以上・最大幅0.75m・深さ0.05～0.1mほどである。S H 01との切り合い関係は不明である。出土遺物には、須恵器・灰釉陶器がある。

### S D 03

北西から南東方向に長く延び、南側でS D 04に切られている。長さ13.5m以上・最大幅1.1m・深さは東に行くにつれて深くなり0.18mとなる。その他の部分では、0.05～0.1m程度の深さである。出土

遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗がある。2次調査が行われた方向に向かうが、これに繋がる遺構はない。

2次調査で検出されている溝は、大半が東西と南北の溝で、S D 03は方向がずれる。

### S D 04

南北に長い溝で、南端でS D 03の埋土を切り込んで掘削されている。長さ7.6m・最大幅1.0m・深さ0.12mほどで、土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。

### S D 05・06

南北に二条並行して走る溝であるが、埋土も他の遺構とは異なり、遺物に近世陶磁器などを含み、新しい時期の溝である。

### S D 07

細い調査区部分を東西に横切るように検出された。西側は調査区外となり東側は攪乱を受けている。長さ2.85m以上・最大幅0.85m・深さ0.2mほどである。遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器があるが、実測ができるものはなかった。

## (4) 土壌

4次調査では、多くの土壌が検出されている。大きさがまちまちで、性格を特定できるものはほとんどない。遺物が大量に出土するというものもなく、廃棄土壌と呼べるものはなかった。以下、主要なもののみ取り上げ記述していく。

### S K 01

S D 01の北側にあり、東西1.5m以上・南北1.5m・深さ0.1m程度で、内部に浅いピットが5つみられる。全形は不明であるが、検出部分は方形をなしている。出土遺物には、土師器・須恵器がある。

### S K 02

不定形の土壌で、深さは0.45mである。S K 03と切り合っているが、先後関係は不明である。

当初、S K 02・03・04は、同一の遺構と思われたが、掘削していくにしたがい、別々の遺構であることがわかった。これらは、S H 02およびS X 01の間にあるが、それらとの関連は詳らかではない。

### S K 03

L字状となる土壌で、出土遺物はない。深さは、

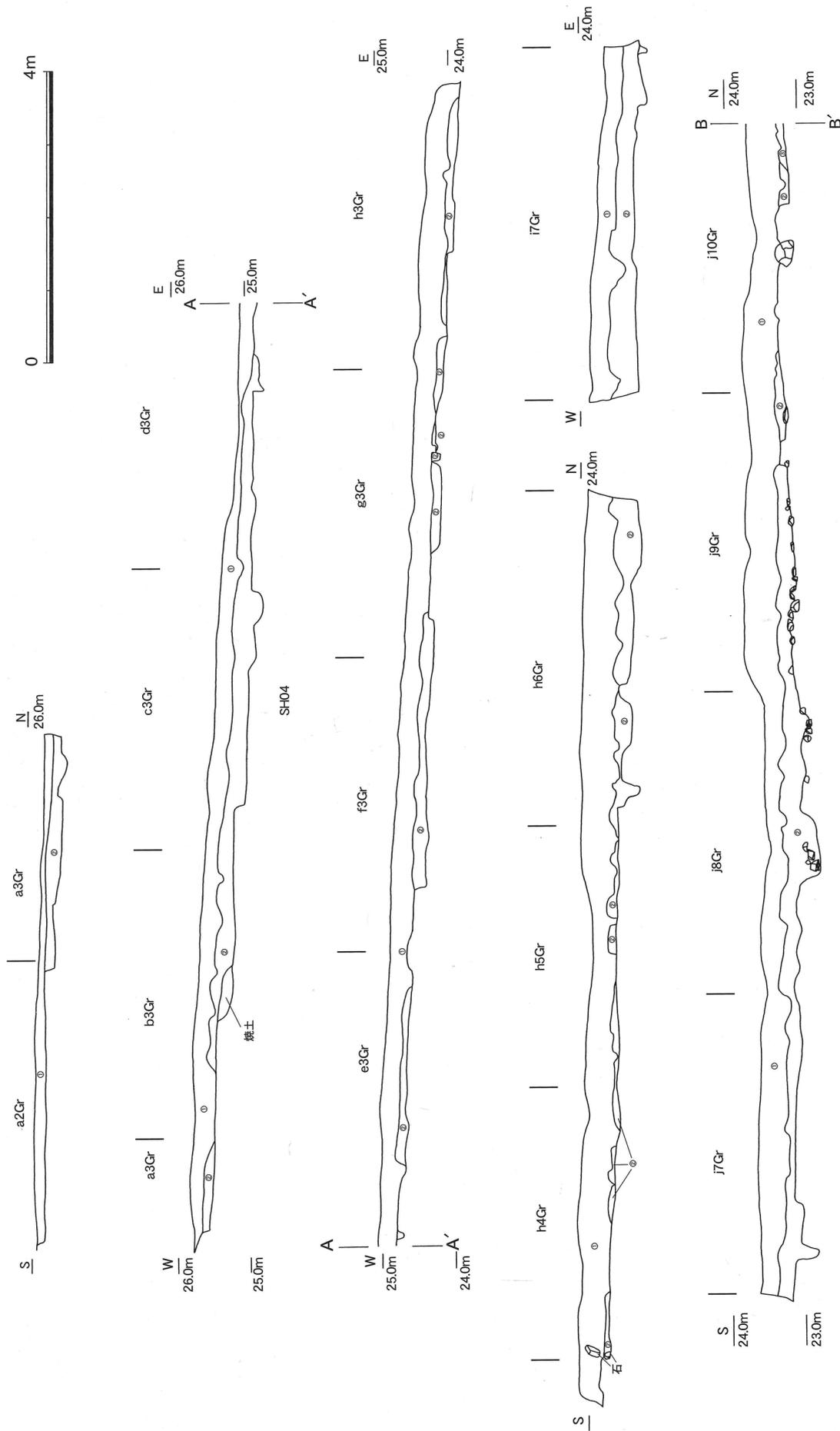


図5 4次調査断面図 (1) (S=1/80)

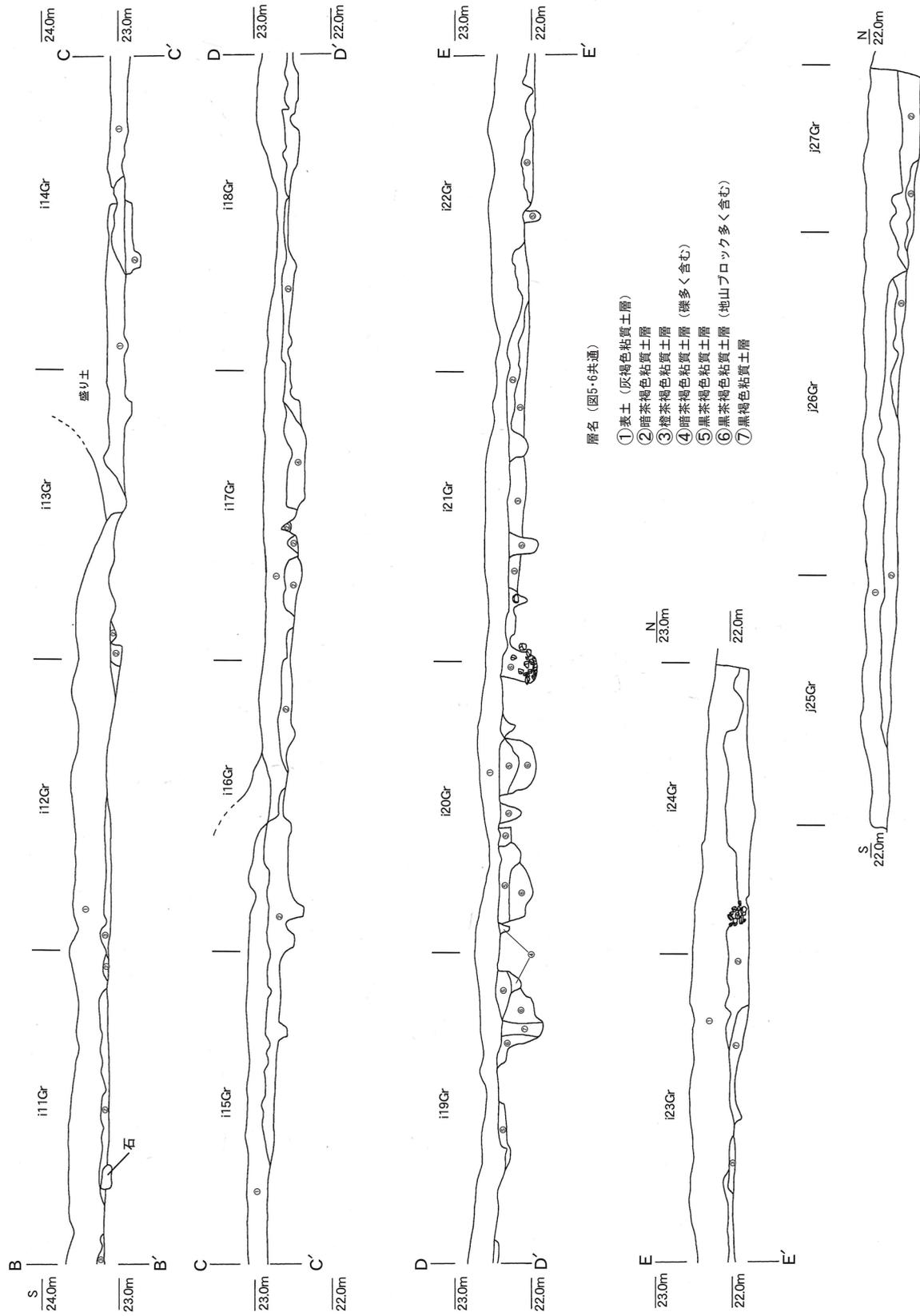


図6 4次調査断面図 (2) (S=1/80)

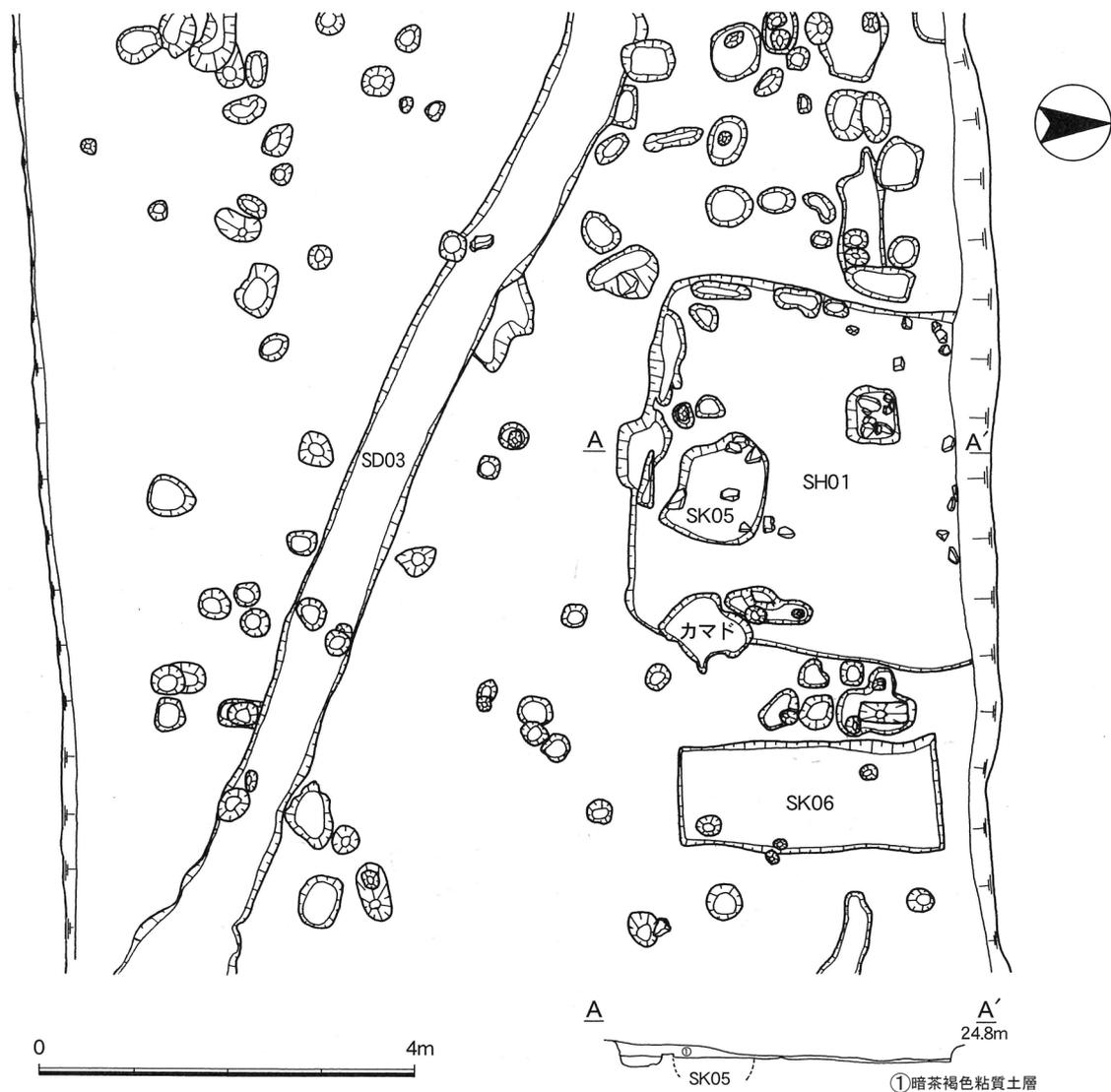


図7 SH01平面・断面図 (S=1/80)

0.3 mである。

**SK 04**

不定形の土壙で、深さは0.4 mである。須恵器・灰釉陶器が出土している。

**SK 05**

SH 01 内にある土壙である。詳細は、そちらで記す。

**SK 06**

東西 1.25 m・南北 2.8 m の長方形で、深さは 0.14 m ほどである。須恵器、灰釉陶器・山茶碗が出土している。

**SK 07**

SD 04 と接する、東西 1.5 m・南北 1.25 m の五角形をした土壙である。土師器が出土している。

**SK 08・09**

二基が並んで検出され、北側の SK 08 は、長軸 2.8 m・短軸 0.85 m で細長い形状をしている。深さは最深部で 0.3 m である。南側の SK 09 も細長い形状で、長軸 1.75 m・短軸 0.55 m・深さ 0.4 m である。土師器・須恵器が出土している。

**SK 10**

調査区南端の SD 05 の西側に位置し、直径 1.5 m・深さ 0.32 m ほどの円形を呈する土壙である。出土遺物には、土師器、須恵器がある。

**SK 11**

SZ 02 の隣にあり、南北 1.8 m・東西 0.95 m である。出土遺物には、土師器・須恵器がある。

**SK 12**



図8 SH02・03・04平面・断面図 (S=1/80)

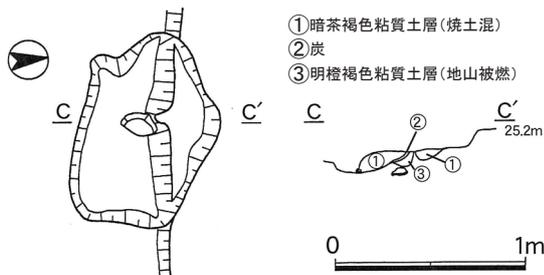


図9 SH02内カマド平面・断面図 (S=1/40)

SH 05 の南側にあり、調査区外へと続いたため全  
景を知ることができない。深さは 0.24 m で、土師器、  
須恵器が出土している。

**SK 13**

SH 05 の東側に位置し、南北 2.3 m ・東西 2.4 m  
以上である。東の向かって床面が傾斜し、最も深い  
ところで 0.44 m となる。出土遺物には、土師器が

ある。

**SK 14**

SD 07 の南側にあり、長軸 3.2 m ・短軸 1.1 m ・  
深さ 0.33 m で、土師器 ・須恵器 ・灰釉陶器が出土  
している。

**SK 15**

不定形の土壌で、複数の遺構が重なっていたもの  
を、一括で掘削してしまった可能性がある。遺物に  
は、土師器 ・須恵器 ・灰釉陶器がある。

**SK 16**

SB 01 の北側に位置し、南北 2.2 m ・東西 0.55  
m ・深さ 0.55 m で、かなり深い土壌である。出土  
遺物は、少量の土師器が出土しただけであった。東  
側は攪乱を受けており、削平されている。

## S K 17

S K 14の北にあり、2.0 m・1.5 mの楕円形で、深さは0.36 mである。東側にはS K 04と同様に削平を受けている。出土遺物には、土師器・須恵器がある。

### (5) 土墳墓

## S X 01

土墳墓と考えられ、調査区の西寄りに位置し、S H 03の南側である。南北1.95 m・東西0.73 mの長方形で、北側は一部0.1 mほど突出している。

内部からは、一部破損しているものもあるが、完形品の碗3個と短頸壺1個が整然と並べられた状態で出土した。西側に碗を据え、東側は碗の上に短頸壺を乗せ、もう一つの碗で短頸壺に蓋をする状態でおそらく、埋納されたままの状態を保っていたと思われる。

遺物は、この他に土師器片が少量出土しているが、埋め戻しに使った土に紛れていたものであろう。次に、埋葬方法であるが、釘などがみつからないため、木棺に納められて埋葬されたかなど詳細を知ることができない。ただ、死者の枕元に副葬品を置いたとするならば、北枕で埋葬されていたと言える。

### (6) その他の遺構

## S Z 01

S Hの南側にあり、南北3.35 mほどで西側は調査区外に延びる。方形に近く、竪穴住居であった可能性もあるが、遺構が他に比べ浅く明瞭でないため、ここに記した。

出土遺物は、土師器・須恵器である。

## S Z 02

南北2.45 m、東西3.0 mのいびつな形状の遺構である。いくつかの土壌が重なり合っているとも考えられる。性格は、不明であるが土師器・須恵器・灰釉陶器など多数の遺物が出土した。

## ピット

その他にも、多くのピットが検出されたが、性格などは不明である。掘立柱建物の柱穴の可能性もあるが、現時点では並んで建物を構成するとの判断はできなかった。

## 第3節 遺物

### (1) 竪穴住居

## S H 01

土師器甕・把手(1)、須恵器杯蓋・無台杯(2)・鉢(3)・甕が出土している<sup>③</sup>。

### 土師器

把手(1)は、板状の粘土を二枚貼り合せ体部に接合している。甕もしくは鍋につくものと思われる。土師器の大半は、小破片のため器種を特定できない。

### 須恵器

無台杯(2)は、底径10.6 cmで底部外面がヘラケズリされ、体部内外面は回転ナデ調整がされている。猿投窯編年V期<sup>④</sup>に位置づけられる。鉢(3)は、小片のため口径は不明である。直線的に開く体部で、口縁部外面がくぼみ、端部が外側に屈曲する。

### 灰釉陶器

図示していないが碗が出土しており、猿投窯編年VI期新段階(9世末から10世紀初頭)に位置づけられる。混入と思われる。

### 土製品

移動式カマド<sup>⑤</sup>(4)は、竪穴住居の造り付けカマドの付近から出土した。内面にはやや右下がりのヨコハケ調整、外面にはタテハケ調整が行われている。外面には、一条の線が刻まれている。器壁は、裾部が厚く作られており、内面のこの部分にはハケ目は認められない。甕の可能性もあるが、内面に煤が多く付着しており移動式カマドと考えられる。

### 鉄製品(5)

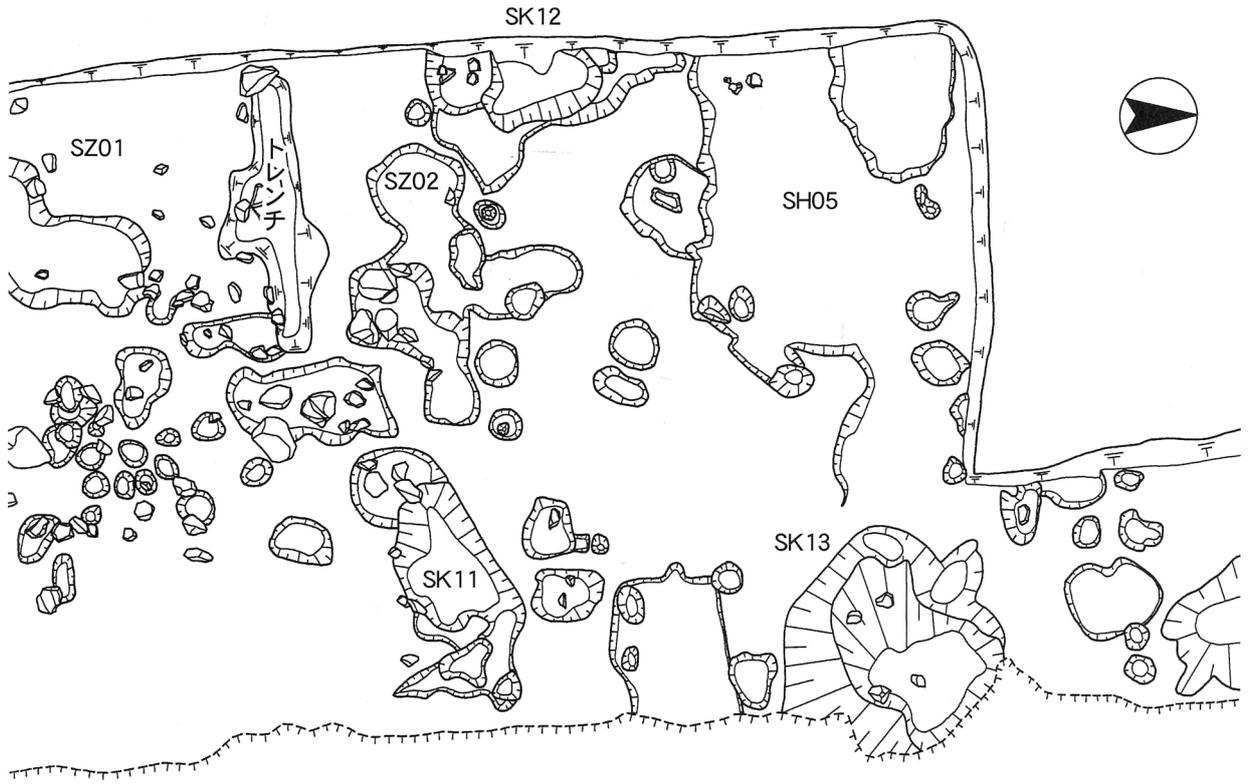
腐蝕が激しく、かなり錆付いている。元の形状は留めており、銚などの先端であろうか。全長は7.9 cmである。

## S H 02

土師器の皿(6)・甕(7)・鍋(8)、須恵器の杯蓋・無台杯(9)が出土している。

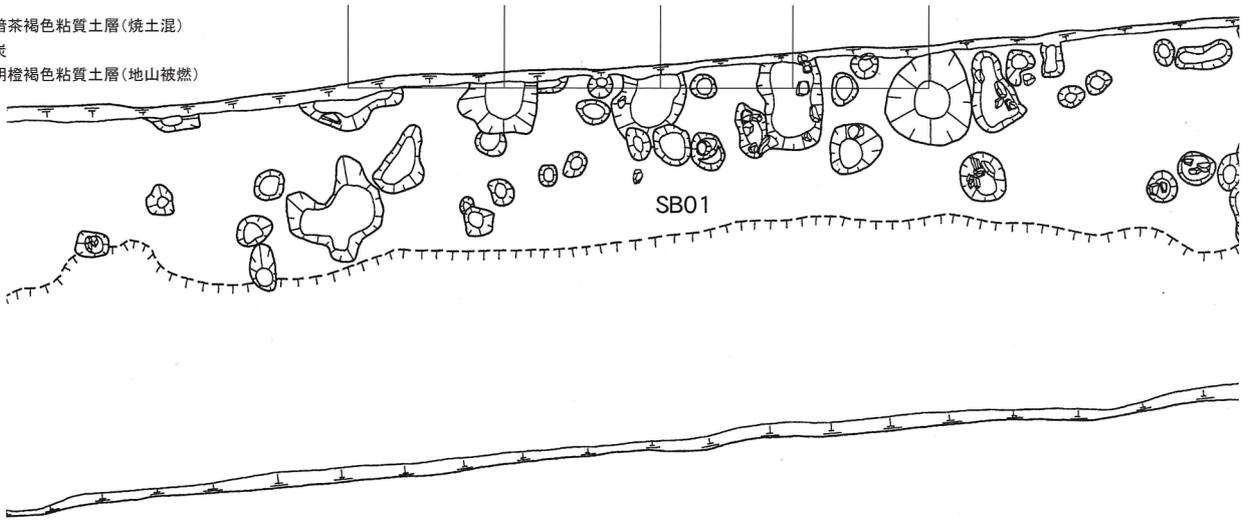
### 土師器

皿(6)は、口径14.6 cm・器高2.2 cm・底部8.6 cmである。橙褐色を呈し、他の土師器の製品とは胎土が異なる。表面の遺存状態が悪いため、製作技法は判らない。



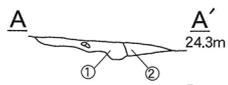
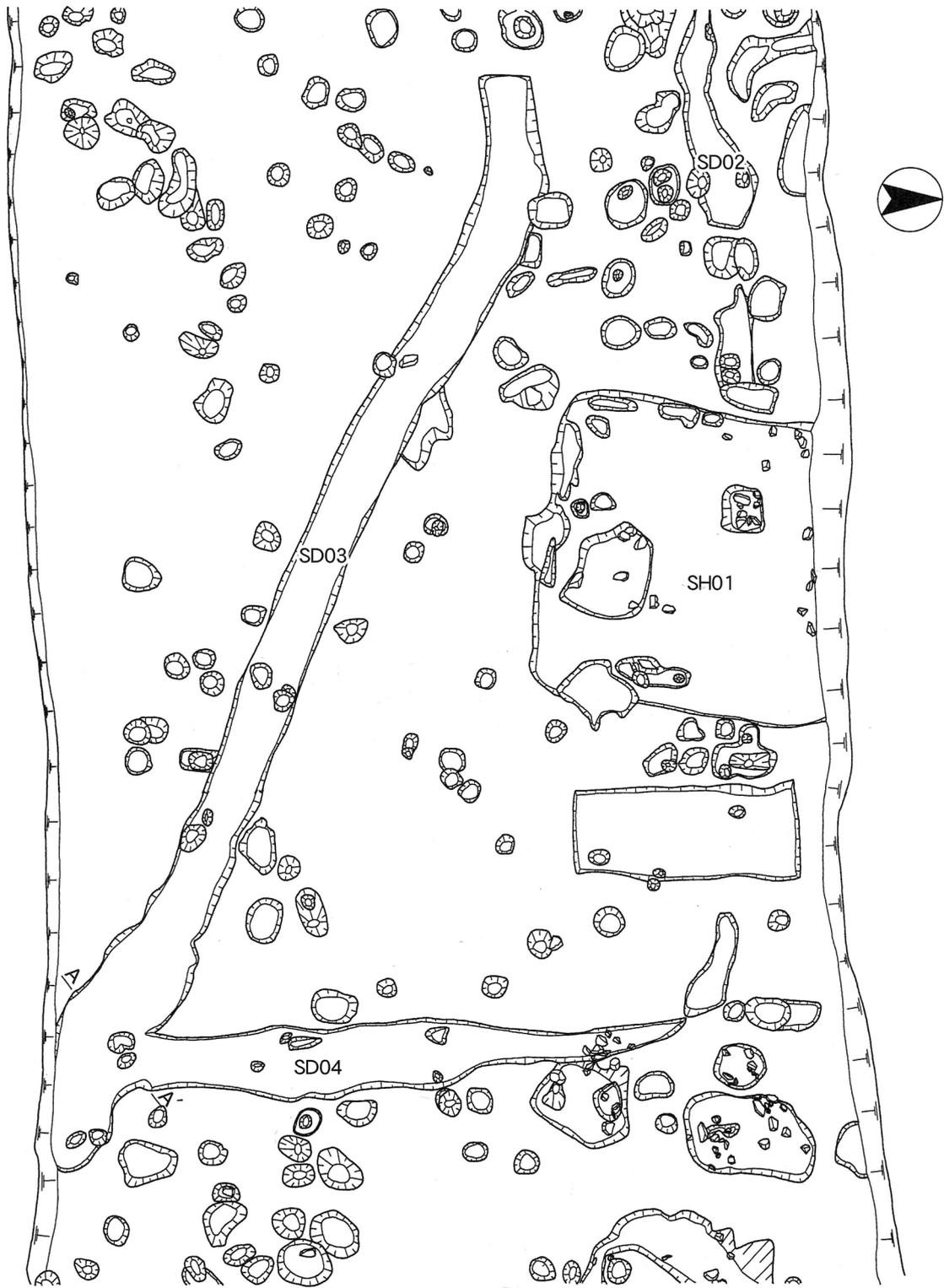
0 4m

- ① 暗茶褐色粘質土層(燒土混)
- ② 炭
- ③ 明橙褐色粘質土層(地山被燃)



0 4m

图10 SH05·SB01平面图 (S=1/80)



- ① 暗茶褐色粘質土層
- ② 茶褐色粘質土層

0 4m

图11 SD03·04平面·断面图 (S=1/80)

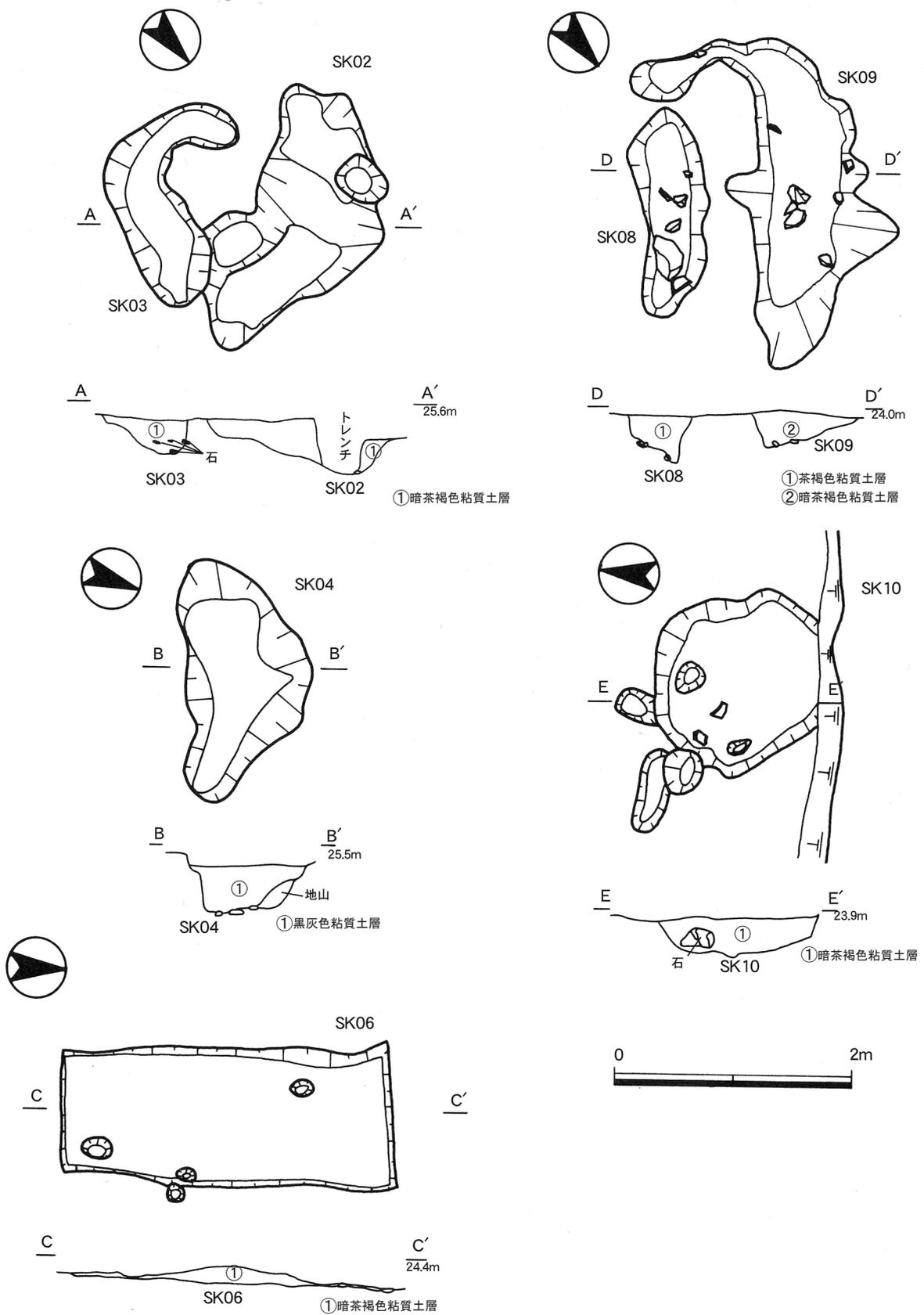


图12 第4次調査土壌平面・断面図(1) (S=1/50)

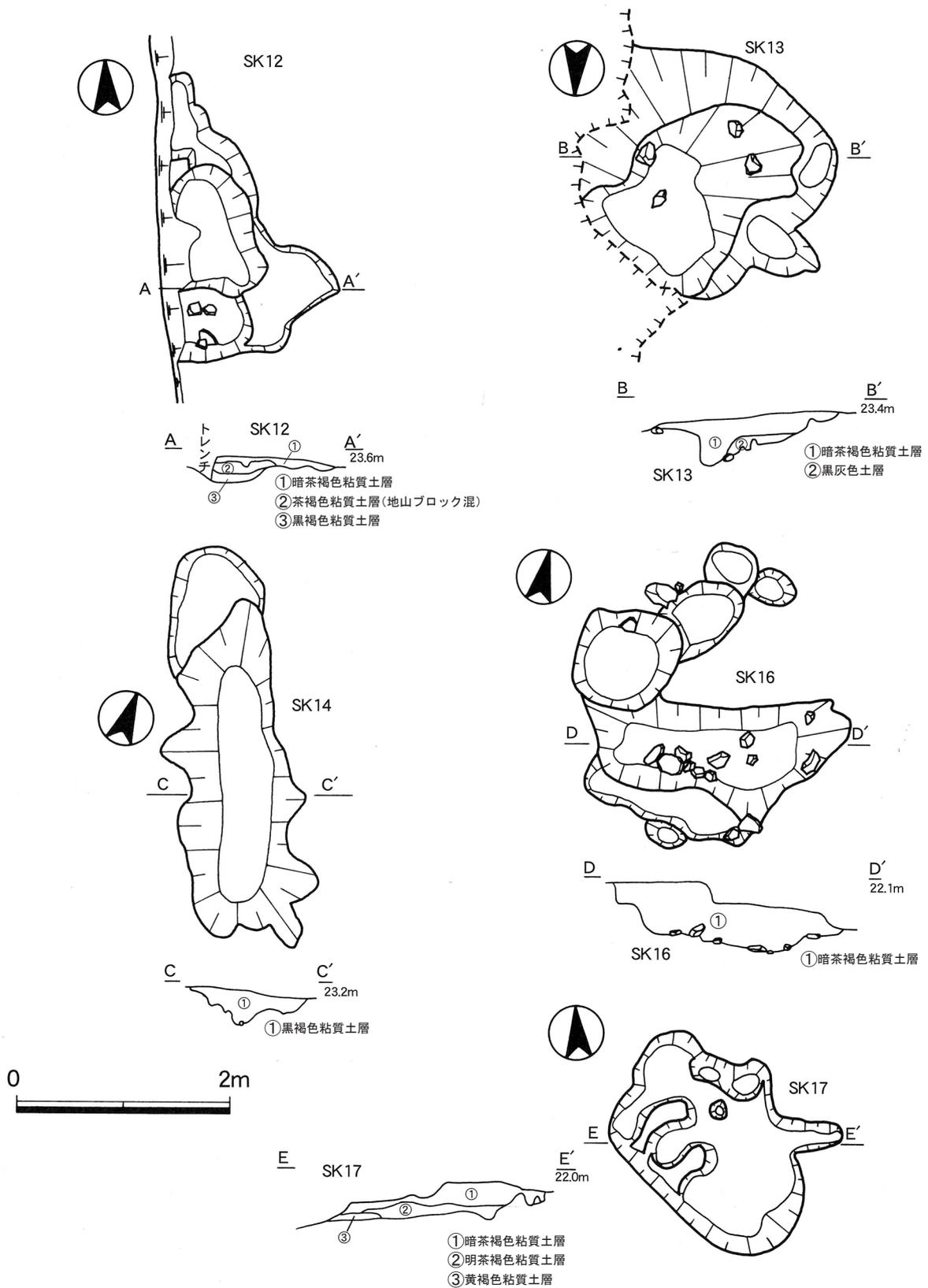


図13 4次調査土壌平面・断面図(2) (S=1/50)

鍋(7)は、底部10.4cmで、体部外面はタテハケの後に裾から2cmほどのところまでヘラケズリ調整をしている。内面は、ヨコハケ調整を行っている。上村分類の鍋D2類と思われる<sup>⑥</sup>。

甕(8)は、口縁端部に面を持つもので、コ字状で上下に突出する。伊勢型甕のバリエーションの中で考えることができる器形である。内外面の調整は、状態が悪く不明。

#### 須恵器

無台杯(9)は、美濃須恵産のもので、底部がヘラオコシの後ヘラケズリを行っている。底部外面には、N字状の線刻がある。8世紀前半頃のものである。

#### SH 03

土師器の杯・甕(10)、須恵器の杯蓋・甕が出土している。

#### 土師器

甕(10)は、頸部が屈曲し、口縁を長く横に引き出し端部は丸く仕上げている。体部外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整を行っている。杯は、図示できないがSH 01の皿と同様に胎土にさほど砂粒を含まず、色調も橙褐色もしくは赤褐色を呈する。

#### SH 04

土師器の甕(11)・鍋、須恵器の杯蓋(12)・有台杯(13・14)・無台杯(15・16)、土製品ではファイゴ羽口(17)が出土している。

#### 土師器

甕(11)は、伊勢型甕で表面が劣化しているため調整技法は不明である。頸部はゆるやかに折れ曲がり、口縁部はやや厚手で端部は面を持ち断面三角形状を呈している。

#### 須恵器

杯蓋(12)は、口縁の折り返しが弱い。この他に、杯蓋が2点ある。

有台杯(13)は、口径14.1cm・底部10.4cmである。腰の部分で割れているが、同一個体である。外面底部は中心を除いてヘラケズリされている。

(14)は、高台径11.5cmで、高台部分のみ生焼けである。外面底部にはヘラケズリがされている。

無台杯(15・16)は、それぞれ底部6.4・6.0cmでヘラオコシされている。両者ともに、美濃須恵産と思われ、焼成は不良である。

これらの須恵器は、猿投窯編年V期古段階に位置づけられる。

#### 土製品

ファイゴ羽口(17)は、先端部分の破片で器壁が1.3cmと厚く胎土に多くの砂礫を含む。鉄滓などが付着しておらず、使用した痕跡はみられない。

#### SH 05

土師器の杯(皿)・甕・甌(18)、須恵器の杯蓋・有台杯(19)、灰釉陶器の碗、山茶碗の小皿が出土している。

#### 土師器

甌(18)は、床面からまとまって出土し(図14)、口径25.7cm・底径12.4cmである。口縁部は、ゆるやかに外側に開き、端部は内側に折り曲げている。口縁部は、内外面ともヨコナデ調整されており、体部外面はタテハケ、内面は一部ユビオサエの痕もみられるが全体はヨコハケ調整である。ヘラケズリ調整は行われていない。

#### 須恵器

有台杯(19)は、付け高台で丸みを持った体部で、ゆるやかに外側に開く。口縁下部が少しくぼみ、口縁部が体部よりも外に開き、端部は丸く仕上げられている。高台は、端部が丸く内側と外側に稜を持つ。外面に黄土を塗布している可能性がある。IV期中～新段階に位置づけられる。SK 10・11から出土した破片と接合した。

#### 灰釉陶器

碗(20)は、三日月高台を持ち高台径は7.2cmである。底部外面は、ヘラケズリがされており、施釉の方法ははっきりしない。次の山茶碗とともに混入と考えられる。

#### 山茶碗<sup>⑦</sup>

小皿(21)は、口縁部のみの破片で降灰が掛かっている。

#### (2) 掘立柱建物

#### SB 01

土師器の杯・甕、須恵器の高杯 (22)・杯蓋・有台杯 (23)、灰釉陶器の皿 (24) が出土している。

#### 須恵器

高杯 (22) は、透かしがなく脚部に 2 本の沈線がある。有台杯 (23) は、方形を呈する付け高台を持つ。両者は、IV期新段階に位置づけられる。一番北側の柱穴と考えられるピットから出土している。

#### 灰釉陶器

皿 (24) は、角高台を有し、内面は全体に施釉されている。印刻花文が見られ、VI期古段階のものである。一番南側のピットから出土している。

二つのピットからは、時期が異なる遺物が出土しており、掘立柱建物の時期を決めるについては、後者の灰釉陶器の時期、9世紀中葉としておく。また、包含層の遺物が、この区域において灰釉陶器の出土破片点数が多くなる。その場合、須恵器は掘削時もしくは柱抜き取り後に落ち込んだか、一番北側のピットのみ別の遺構ということも考えられる。

### (3) 溝

#### S D 02

土師器の甕ほか、須恵器の杯蓋 (25)・甕、灰釉陶器の碗 (26) が出土している。

#### 須恵器

杯蓋 (25) は、口径 13.7cm・器高 2.6cm で頂部に扁平な宝珠形の鈕がつき、点上部の中ほどまでヘラケズリがされている。口縁部は、折り返しがまっすぐ下に向かい、端部は丸く仕上げられている。

#### 灰釉陶器

碗 (26) は、付け高台で底部の際に付けられている。三日月高台であるが、内側の内彎と外側の稜も弱い。高台径は、8.9cm である。VI期古段階に位置づけられ、その中でも新しい様相をみせる。

#### S D 03

土師器の甕ほか、須恵器の杯蓋 (27)・無台杯 (28)、灰釉陶器の碗 (29・30)、皿 (31) が出土している。

#### 須恵器

杯蓋 (27) は、器壁が厚く、口縁も短く斜めに折り返されている。

無台杯 (28) は、回転糸切り痕がそのまま残され、

底径は 5.8cm である。内面は磨耗している。

#### 灰釉陶器

碗 (29) は、内外面に灰釉が施釉されている。施釉の方法は、判然としない。(30) は、内側の内彎と外側の稜が弱い三日月高台で、比較的高い。内外面体部と内面底部にも釉がみられる。内面には使用痕がある。

皿 (31) は、底部および体部が薄手に作られており、高台径は、6.9cm である。

これらの遺物の年代は、VI期中～新段階のものである。

### (4) 土壇

#### S K 02

土師器の甕・把手 (32)、須恵器の高杯 (33) が出土している。

#### 土師器

把手 (32) は、残存している体部の彎曲が比較的強く、鍋もしくは小型の甕につくものと思われる。

#### 須恵器

高杯 (33) は、美濃須衛産のもので灰白色な胎土を持ち、脚部の下部に凹線が巡り、透かしはない。7世紀代のものである。

#### S K 04

須恵器の有台杯・甕 (34・35)、灰釉陶器の皿が出土している。

#### 須恵器

甕 (34) は頸部の破片、(35) は体部片で平行タタキが見られる。

#### 灰釉陶器

皿は図示していないが、内面全体に施釉されており、体部もヘラケズリされている。猿投窯編年VI期古～中段階に位置づけられる。

#### S K 08・09

当初、一つの遺構として掘削し、一括して遺物を取り上げたため、まとめて報告する。土師器、須恵器の杯蓋 (36)・盤 (37)・甕 (38) が出土している。

#### 須恵器

杯蓋 (36) は、端部がやや上方に反ってから折り

返され、端部は断面三角形状となる。

盤(73)は、高台径9.4cmで、底部外面から体部下  
方までヘラケズリされている。高台は付け高台で、  
外側端部が接地するが出っ張りは少ない。内面底部  
には使用痕がみられる。

甕(38)は、弧を描くように外に広がり口縁とな  
る。口縁端部は、下に大きく突出し広い面を持って  
いる。

これらの須恵器は猿投産であり、V期中～新段階  
のものである。

### S K 10

土師器片が多数出土し、実測可能なものは把手  
(39)しかない。この他にも、須恵器の有台杯(19)  
が出土しており、これはSH 05・S K 11出土遺物  
と接合した。

### S K 11

土師器の甕、須恵器の杯蓋(40)・有台杯(19)が  
出土している。

須恵器

杯蓋(40)は、直線的に口縁に至り、折り返しも  
斜め下に曲げられているのみである。猿投窯編年の  
IV期中段階もしくは新段階のものである。

### S K 12

土師器の杯・甕、須恵器の杯蓋・有台杯・鉢(41)・  
瓶類が出土している。

須恵器

碗(41)は、金属器を模倣したタイプで、丸い体  
部を持ち、一度内側に彎曲した後外傾し口縁とな  
る。口縁部の内側には、面を持っている。口径は  
14.5cmで、V期～VI期のものである。

### S K 13

土師器が少量出土しているのみで、杯(42)は口  
径14.2cm・器高3.1cm・底径8.9cmである。内面が  
黒褐色に変色している。

### S K 15

土師器の甕(43・44)、須恵器の杯蓋・甕、灰釉陶

器の碗(45)が出土している。

土師器

甕(43)は台付甕の台部で、(44)は端部が丸く仕  
上げた口縁部片である。

須恵器

杯Hの蓋が1点出土しているが、小片のため図示  
することができなかった。

灰釉陶器

碗(45)は、高台が外側の稜が強く、比較的高い  
ものとなっている。高台径が7.1cmで、外面体部と  
内面の底部に施釉が認められる。また、不鮮明な  
ため判読がむずかしいが、外面底部に墨書がある。

### S K 17

土師器の甕(46・47)、須恵器の杯蓋(48)が出土  
している。

土師器

甕(46・47) 46は、宇田型甕と呼ばれるもので、  
口縁部は短く肥厚し、端部に面を持っている。外面  
の体部にはタテハケ、口縁部にはヨコナデが行われ  
ている。内面の調整は、遺存状態が悪く不明である。  
47は、口径13.8cmで外面の体部にタテハケ、口縁  
部にヨコハケが行われている。口縁端部は、摩滅の  
ためやや形が崩れているが、断面三角形状となり、  
伊勢型甕と思われる。

S K 17は、上層と下層で分層が可能であり時期  
差があるとも考えられるが、宇田型・伊勢型が同じ  
遺構から出土していることは興味深い。

須恵器

杯蓋(48)は、体部と口縁部の境界に稜を持つも  
のである。口縁部はやや外側に開く。また、これと  
は別に3点出土している。猿投窯編年のII期新段階  
～III期古段階(6世紀中葉頃)に並行する時期のも  
のと考えられる。

(5) 土墳墓

### S X 01

少量の土師器と、灰釉陶器の碗(49～51)と短頸  
壺(52)が出土している。土師器は、遺構を埋め戻  
した際に紛れ込んだものと思われる。

灰釉陶器

碗 (49・50・51) 49は、口径 15.5cm・器高 5.2cm・高台径 6.8cm で灰釉を漬け掛けしている。器壁は薄く仕上げられており、腰は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部はほとんど外反しない。口縁端部は、体部に比べてやや厚く、丸く整えられている。底部内面には重ね焼きの痕跡があり、使用痕も確認できる。底部外面には糸切り痕が残されている。高台は付け高台で、幅が広く内側はほとんど内彎しないが外側の稜は強く突出する。

50は、口径 13.7cm・器高 4.4cm・底部 6.5cm で、49に比べて小振りである。口縁から体部には灰釉が漬け掛けされている。体部は、49よりも直線的に外に開き、口縁部は少し外反する。内面底部には使用痕がみられ、底部外面にはヘラケズリ調整がされている。高台は付け高台で、内側が内彎し外側下方の稜がほとんどない、形が崩れた三日月高台である。

51は、口径 15.1cm・器高 4.5cm・高台径 7.0cm である。口縁から体部には灰釉を漬け掛けしている。ナデ調整をしっかりと行っていないためか、体部には凹凸が顕著に残る。そのため、全体のつくりが前二者に比べ粗雑な印象を受ける。体部は、50と同様に直線的に外に開く。口縁部は外反しないが、端部は横方向に突出している。高台も粗雑なつくりで、高さも低く内側の内彎が弱いいため台形に近い形状である。また、外面の体部との接合部をナデによる調整をしていないため、両者の境界が鮮明にのこる。

短頸壺 (52) は、口径 5.5cm・器高 11.0cm・底径 5.9cm である。底部は平底で、糸切り痕が残る。体部下方向は部分的にヘラケズリがされている。体部は、外に開きながら立ち上がり、角の張った肩を持ち口縁部へと至る。口縁部は短く、外に開き短部は丸く滑らかである。口縁から肩部そして胴部上半まで灰釉が刷毛塗りされている。

これらの灰釉陶器は、東濃産で 10 世紀前半（平安京Ⅱ期新段階）に属すると考えられる。

(6) その他の遺構

## S Z 01

土師器の甕 (53・54)、須恵器の杯蓋・有台杯・甕が出土している。

土師器

甕 (53・54) 53は、口径 12.5cm で口縁端部が薄く、外面に窪みがある。30は平底となるもので、底径は 6.0cm を測る。伊勢型甕は丸底であり、平底となる濃尾型甕の底部と思われる。

## S Z 02

土師器の杯、甕、須恵器の杯蓋 (55)・有台杯 (56・57)・無台杯 (58)、灰釉陶器の深碗 (59)、土製品では志摩式製塩土器 (60) が出土している。

須恵器

杯蓋 (55) は、口径 14.6cm・器高 4.1cm で、天井部には扁平な宝珠形の鈕を有する。体部中ほどまでヘラケズリがされ、口縁部は下方に折り返され、端部は横に引き出されている。猿投窯産のものであろう。

有台杯 (56・57) 56は、高台径 10.5cm で底部外面はヘラケズリがされている。高台は、バチ型であるが丸みが強く、外側への出っ張りは弱い。57は、口径 15.0cm・器高 5.8cm・高台径 9.1cm とかなり深い形の杯身である。外面底部はヘラケズリされており、高台は付け高台で比較的高く、長方形に近い。

無台杯 (58) は、底径 5.4cm で底部外面には糸切り痕が残る。

灰釉陶器

深碗 (59) は、高台径 6.6cm で大きな高台を持つ。腰の張った体部で、高台は先端が丸く、内側はほとんど内彎せず、外側の稜は上目にみられる。

須恵器・灰釉陶器の年代は、VI期古～中段階前後のものである。

土製品

志摩式製塩土器 (60) は、淡橙褐色の胎土を持ち、1～2mm ほどの砂粒を多く含んでいる。器壁は、最も厚いところで 1.1cm ある。底部は、すべて欠損している。

## Pit 1

須恵器浅鉢 (61) が出土している。把手部分のみで、指圧により成形された痕が明瞭に残る。

## Pit 2

土師器甕 (62) は、口縁部の引出しが短く、外面の口縁部下方から体部に粗いハケ目がみられる。内

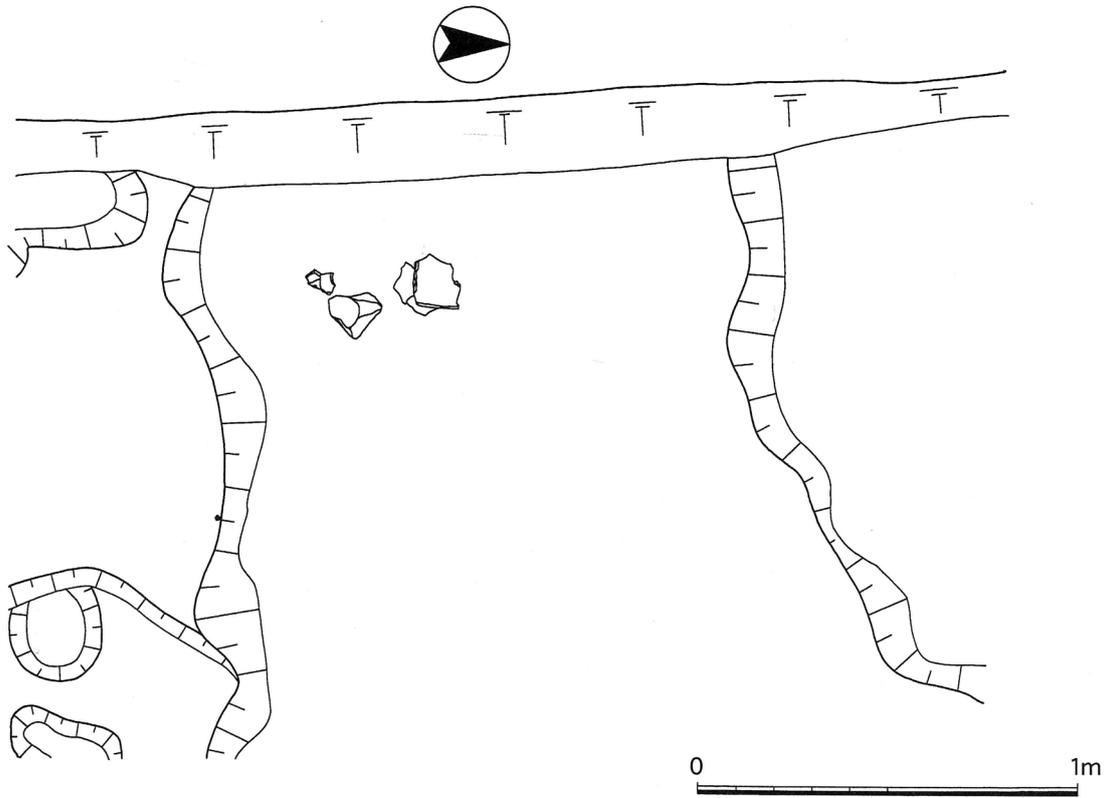


图14 SH05遺物出土狀況 (S=1/20)

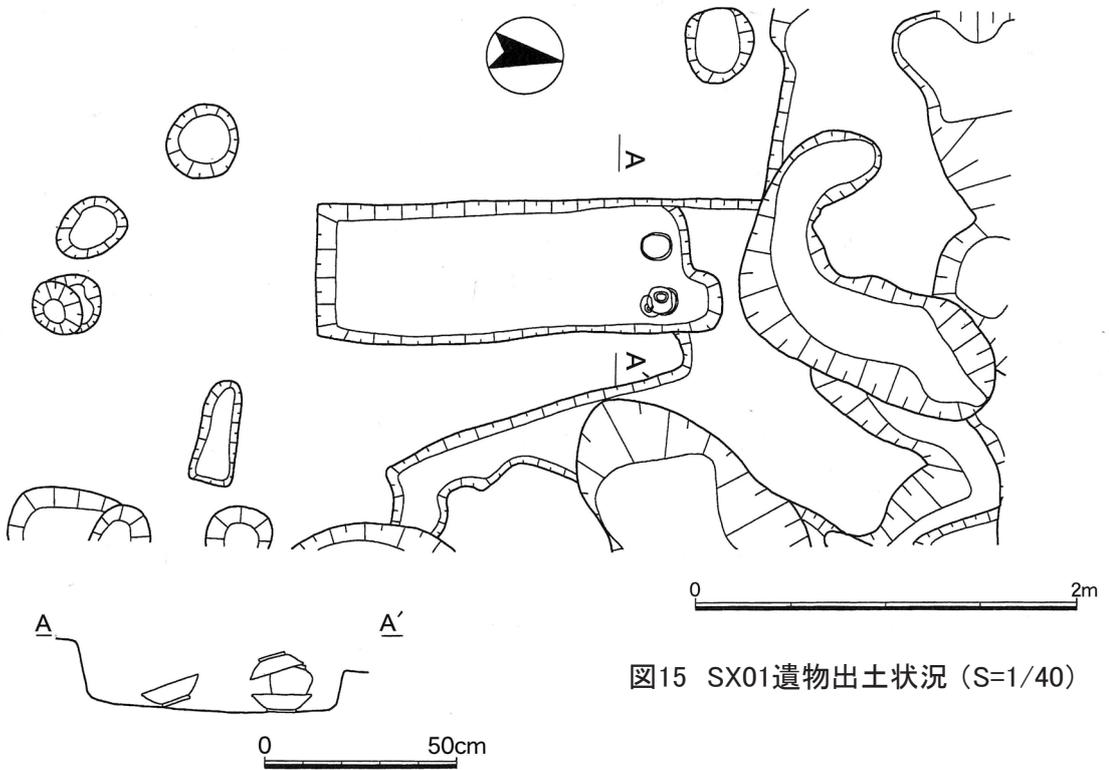


图15 SX01遺物出土狀況 (S=1/40)

图16 SX01遺物出土狀況模式圖 (S=1/20)

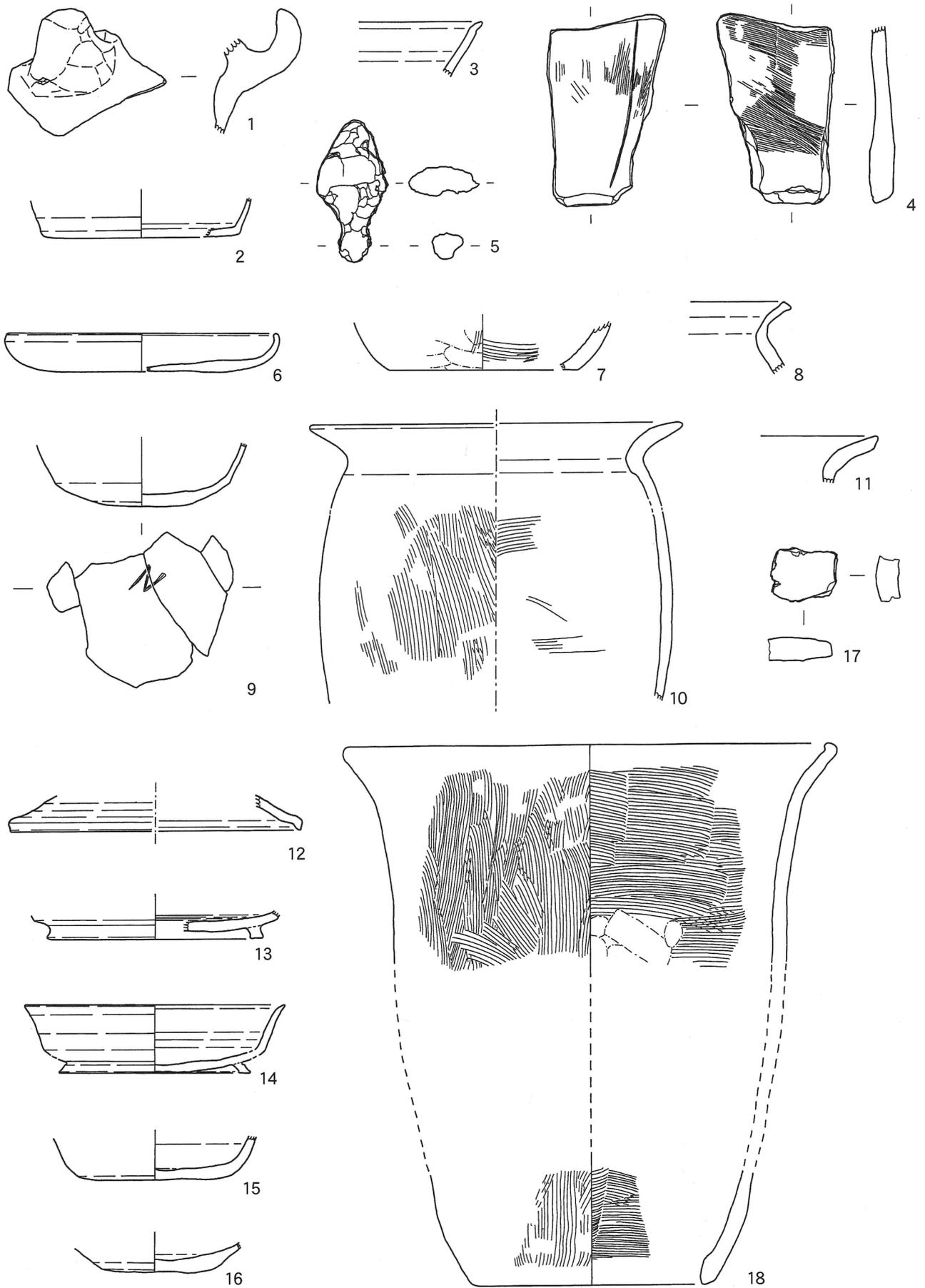


図17 4次調査出土遺物実測図(1) (S=1/3)

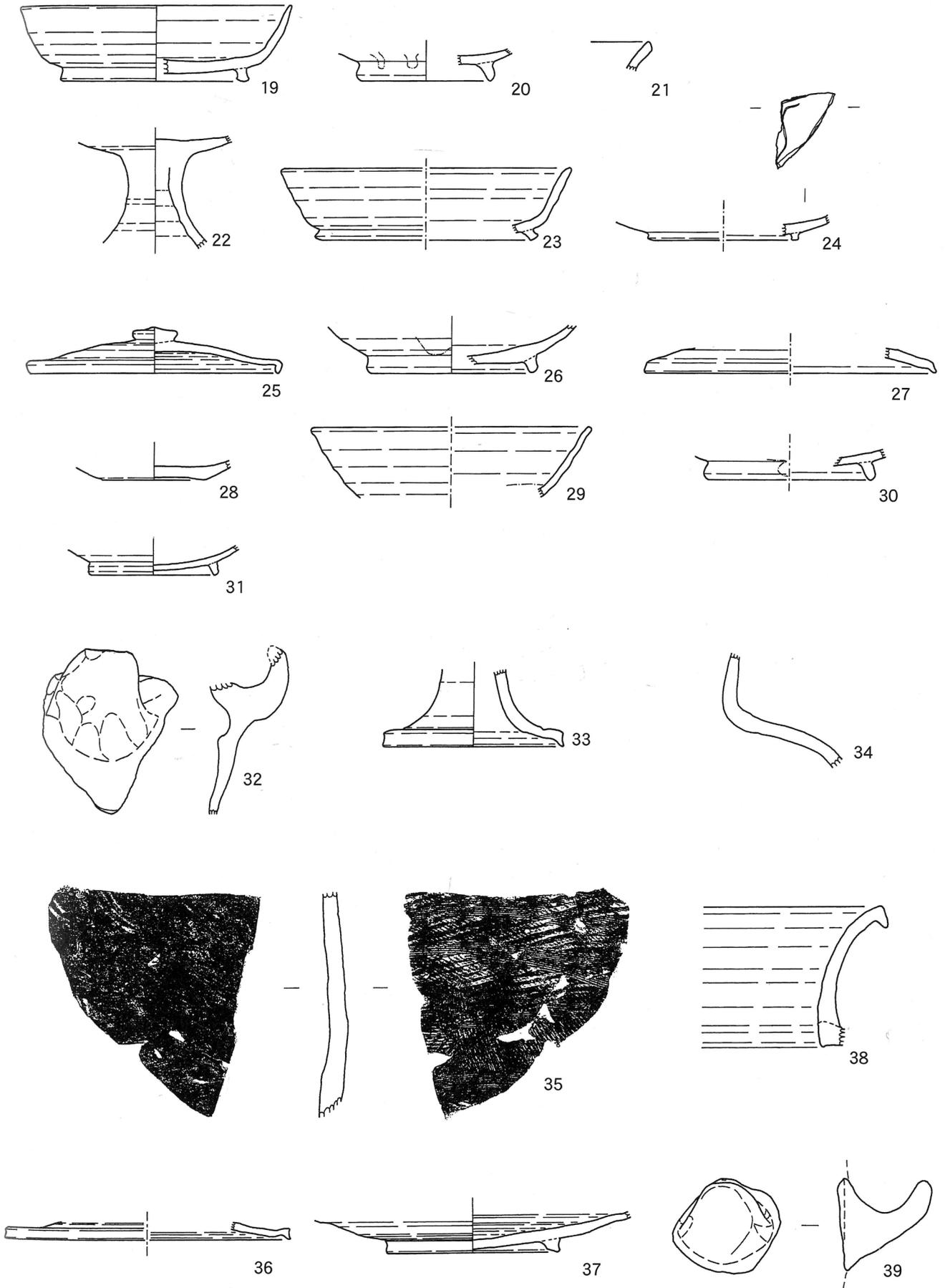


图18 4次調査出土遺物実測図(2) (S=1/3)

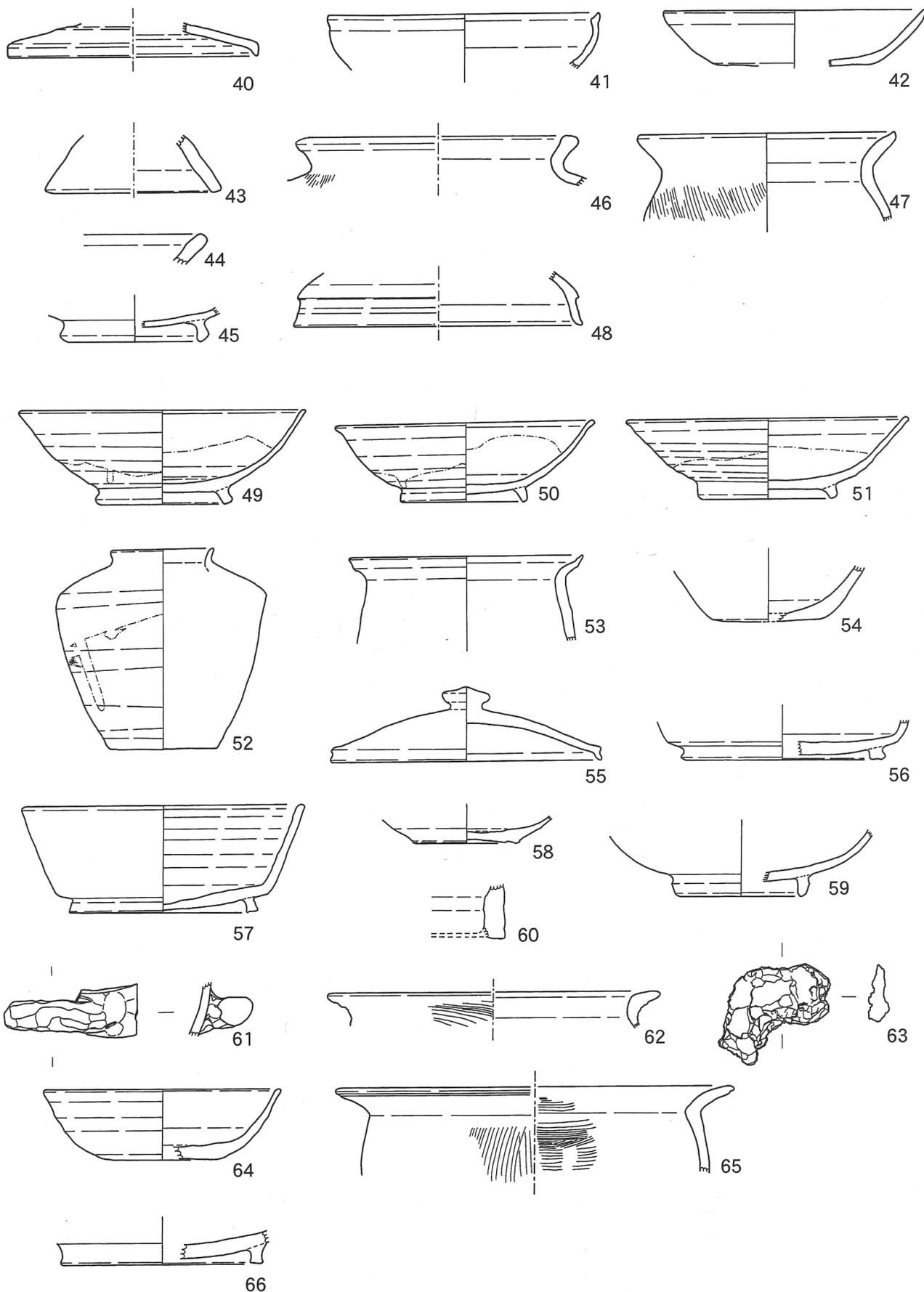


图19 4次調査出土遺物実測図(3) (S=1/3)

面の調整は、遺存状態が悪いため不明である。濃尾型甕に分類されるもので、伊勢型甕とは胎土もことなり、細かい砂粒が多く含まれる。

#### Pit 3

鉄製品 (63) は、L字形をなすものであるが器種・用途などは不明である。

#### Pit 4

須恵器無台杯 (64) は、口径 12.7cm・器高 3.9cm・底径 5.2cm でヘラオコシである。

#### Pit 5

土師器甕 (65) は、口縁～体部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、口縁外面はヨコナデがされている。口縁端部直下にくぼみが巡る。

#### Pit 6

須恵器 (66) は、厚い底部と高く下膨れの高台を持ち、内面には使用痕が認められる。また、外面底部にはヘラケズリがなされている。

#### (7) 包含層出土の遺物

包含層である暗茶褐色粘土質土層からは、剥片・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・瓦・土製品・鉄製品などが出土している。破片数で 3626 点、コンテナ 4 箱程度である。調査の段階では、近世の陶磁器片も出土しているが、耕作などにより混入したものであり、ここでは除外した。

#### 土師器

包含層から出土した遺物で最も多いのが土師器である。破片にして 2479 点であるが、大半は器種も特定できない小破片ばかりで、図化できたものは少ない。さらに、図化できたものでも磨耗が激しいため製作技法を明確にできていない。

杯 (67) は、口径 12.3cm・器高 3.1cm・底 6.8cm で非ロクロ成形である。

甕 (68～77) 68 は、台付甕の台部とおもわれる。69～73 は、口径 14.6cm～27.2cm で、口縁端部が断面三角形を呈し、一部は体部外面タテハケ、内面にヨコハケが確認できるものがある。74・75 は、口縁部が「く」字状あるいは水平方向に折れるものである。76 は、口縁部を横に引き出し端部を丸くおさめる。外面の頸部から体部にかけて粗いハケ目調

整が施しており、濃尾型甕と考えられる。77 は、口縁端部が内側に折り曲げられており、伊勢型鍋の前身とされる甕と考えられる。

鍋 (78) は、口縁端部が三角形になるようであるが、口縁部が広く上方に向くことから甕ではなく、鍋と判断した。口縁下部には稜線があり、内面にはハケ目が認められる。

甌 (79) は、口縁部が甕とは異なり、折れることなくまっすぐ立ち上がって端部となっており、甌の口縁部とおもわれる。端部は、丸く仕上げられているが、その他の調整方法は不明である。

把手 (80・81) は、図化したものも含め 4 点出土している。明確にどの器種に付くかは断定できないが、甌・鍋もしくは移動式カマドの可能性もある。

#### 須恵器

土師器について出土量が多いのが須恵器で、637 点出土している。器種には、杯蓋・杯身・無蓋高杯・碗・盤・長頸瓶・短頸壺・甌・横瓶・甕がある。

杯蓋 (82～91) 82～84 は、天井部がヘラ削りされ、口縁部と天井部の間に明瞭な稜を有する。85 も天井部がヘラ削りされるが、稜がほとんど沈線化している。82 は、猿投窯尾野編年Ⅱ期古段階に位置づけられる。84 は 7 世紀のもので、85 はⅣ期古段階である。86 は口縁の内側にかえりを持つ蓋でⅣ期中段階である。87～91 は口縁端部を下方に折り曲げたタイプで、89 以外は口縁部のみ残存し、時期は概ねⅤ期中～新段階である。

杯身 (92～105) 92・93 は、受け部を持つ古墳時代型の杯身であり、92 は在地の窯で生産されたものと考えられ 7 世紀に位置づけられる。94～97 は無高台の杯身で、94 はヘラおこしその他は回転糸切りである。94 は、美濃須衛窯産と考えられる。98～105 は、高台を有するもので、概ねⅤ期中～新段階である。

無蓋高杯 (106) は、小破片であるが、体部に楕円描きによる波状文が施されている。

碗 (107・108) は、口縁部のみであるが、8 世紀末から 9 世紀初めごろのものである。

盤 (109) は、体部が厚いところで、1cm にもなる。

長頸瓶(110～113) 113は、ミニチュア長頸瓶で底部に粘土を継ぎ足した痕跡が認められる。その他は、口縁部のみで全体像は分からないが、110は体部に黄土が塗布されている。

多口瓶(114)は、体部に黄土が塗布されている。小破片のため厳密には器種が断定できないが、ここでは多口瓶としておく。

台付長頸瓶(115・116)115は高台部のみで、116は肩部で外面に平行タタキと内面に当て具痕がみられる。

短頸壺(117)は、高台径が14.3cmあり、V期新段階に比定される。

甕(118・119) 体部の破片が2点出土している。両者とも、2本の沈線が施され、その間に楯状工具によるとおもわれる列点文が118に、波状文が119に認められる。

横瓶(120)は、口縁部片のみで、外面にゆるやかに突出する稜が巡る。

甕(121)は、外面に黄土が塗布され黒褐色に光る。部分的にしか認められないためはっきりしないが、波状文がみられる。この他に、列点文のある頸部片や、体部の破片では外面の平行タタキと外面の当て具痕がみられるものもある。

## 灰釉陶器

253点あり、出土している器種は碗と皿(段皿を含む)だけである。底部から体部にかけての破片ばかりで、全体を図化できたものはなかった。

碗(122～128) 122は、内面全体に施釉がみられ三叉トチンを使用した痕跡が残る。高台は蛇の目高台と言われる形体をなし、VI期中段階に比定される。123～128は三日月高台で、底部外面は125・128が糸切り、それ以外はヘラ削り調整されている。VI期中～新段階にかけてのものである。

皿(129～133) 129は外側にやや開くU字状の高台で、130～132の高台は低く端部が丸く仕上げられている。130～132は回転糸切り痕がそのまま残る。133は、段皿で内外面に灰釉が施されている。

## 山茶碗

山茶碗は、28点確認されたが、図化できたのは2

点のみであった。第1章でも触れたとおり、12世紀以降の遺物については、包含層で認められる程度である。

碗(134・135)は、両者ともに南部系の荒肌手の山茶碗で、胎土は粗雑で高台の付け方も雑である。135は、内面底部に指圧痕もみられる。時期は、134が藤澤編年第5型式・斎藤編年VII-3型式、135が藤澤編年第6型式・斎藤編年VIII-1型式に比定可能である。

## 土製品

志摩式製塩土器(136)は、小破片のため口径を復元することができないが、他の事例からすると15～20cm程度になると考えられる。体部には、3段の粘土紐輪積み成形の跡が残る。遺構からも1点出土しており合計2点となる。

土錘(137)は、長さ6.3cm、幅2.5cm、孔径0.5cmの管状土錘である。一部欠損しているが、重さは37.2gである。

移動式カマド(138)は、「掛け口」から焚き口の上を覆う「曲げ庇」の部分の破片と考えられる。内面に被熱の痕跡は認められない。

## 瓦

平瓦(139)は、隣接する北小山廃寺の瓦が何らかの要因により持ち込まれたものであろう。凸面の斜格子タタキで、凹面には布目痕が認められる。

## 鉄製品

釘(140)は、腐食がはげしいが、長さは6.6cmである。

### (8) 表土・表採

須恵器有台杯(141)は、表土から出土したもので、高台径7.6cmで端部が外側に開く高台を持つ。外面底部は、ヘラケズリの後にナデられており、「十一月」と読む事が出来る墨書がみられる。8世紀前半のものである。

瓦(142)は、硬質に焼け締まった丸瓦である。凹面には模骨痕・布目痕、凸面はナデ調整がされている。これ以外にも、軟質な焼成で凹面には布目痕、

凸面には格子タタキがされているものもある。

(石神教親)

注

- ①岡田登「考古編」『多度町史』資料編1 2002年
- ②2次調査のS B 74・75・76とS B 84・85・86が重複関係にある。
- ③土師器については上村安生氏(三重県史編さん室)、須恵器・灰釉陶器については尾野善裕氏(京都国立博物館)のご教授を得た。
- ④猿投窯編年は、尾野善裕氏の編年をもとにしている。  
尾野善裕「東海」『古代の土器研究会第5回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東5— 7世紀の土器』1997年

尾野善裕「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』第96号 1999年

尾野善裕「猿投窯(系)須恵器編年の再構築」『第1回東海土器研究会資料 須恵器生産の出現から消滅—猿投窯・湖西窯編年の再構築—』2000年

- ⑤移動式カマドには、置きカマド・竈型土製品・竈型土器などの用語があるがここでは、造り付けカマドに対して移動式カマドの名称を用いる。
- ⑥上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム鍋と甕そのデザイン』1996年
- ⑦ここでいう山茶碗とは、瓷器系中世陶器第Ⅱ類を指す。  
檜崎彰一「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3』日本中世 小学館 1977年

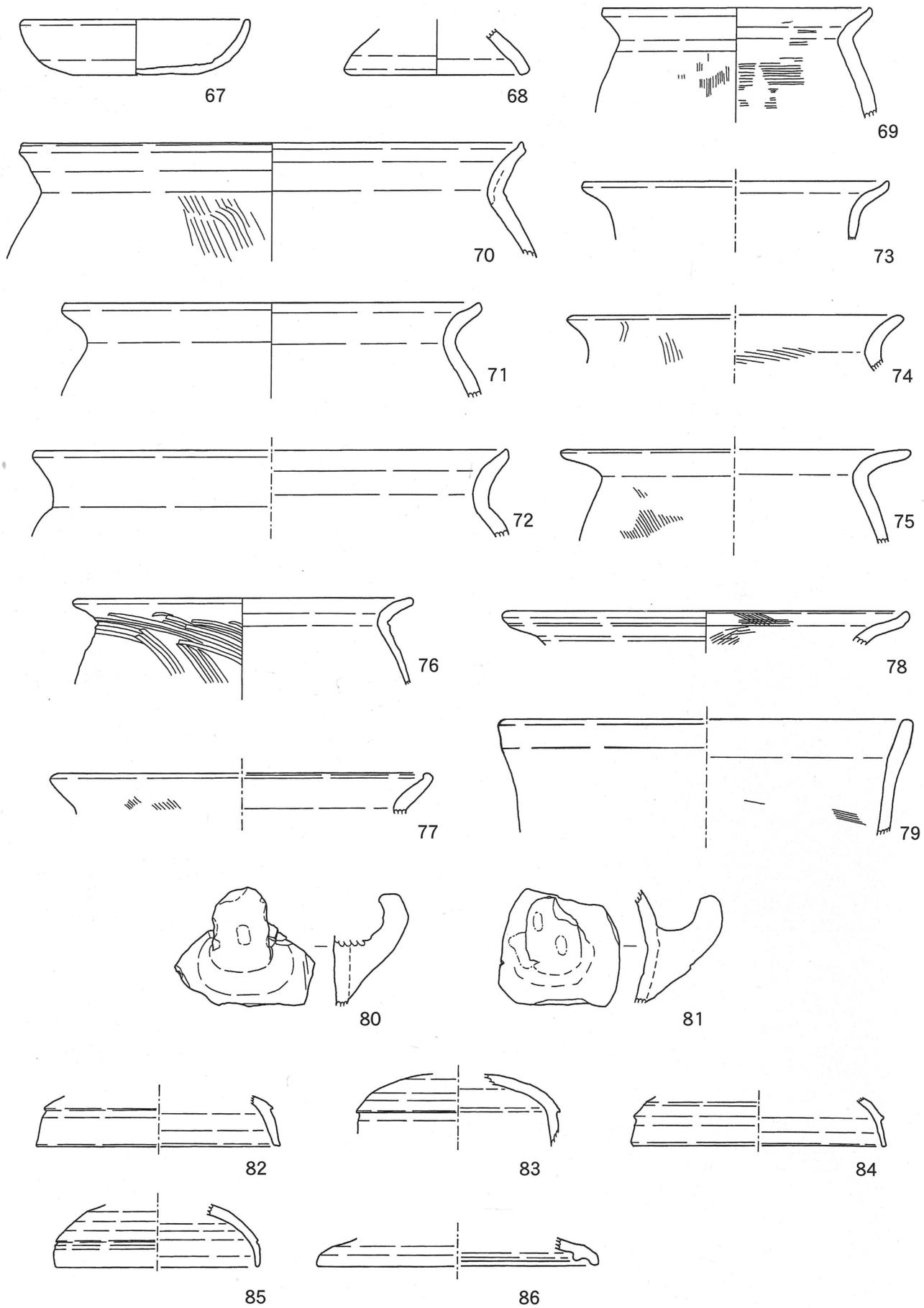


图20 4次調査出土遺物実測図(4) (S=1/3)

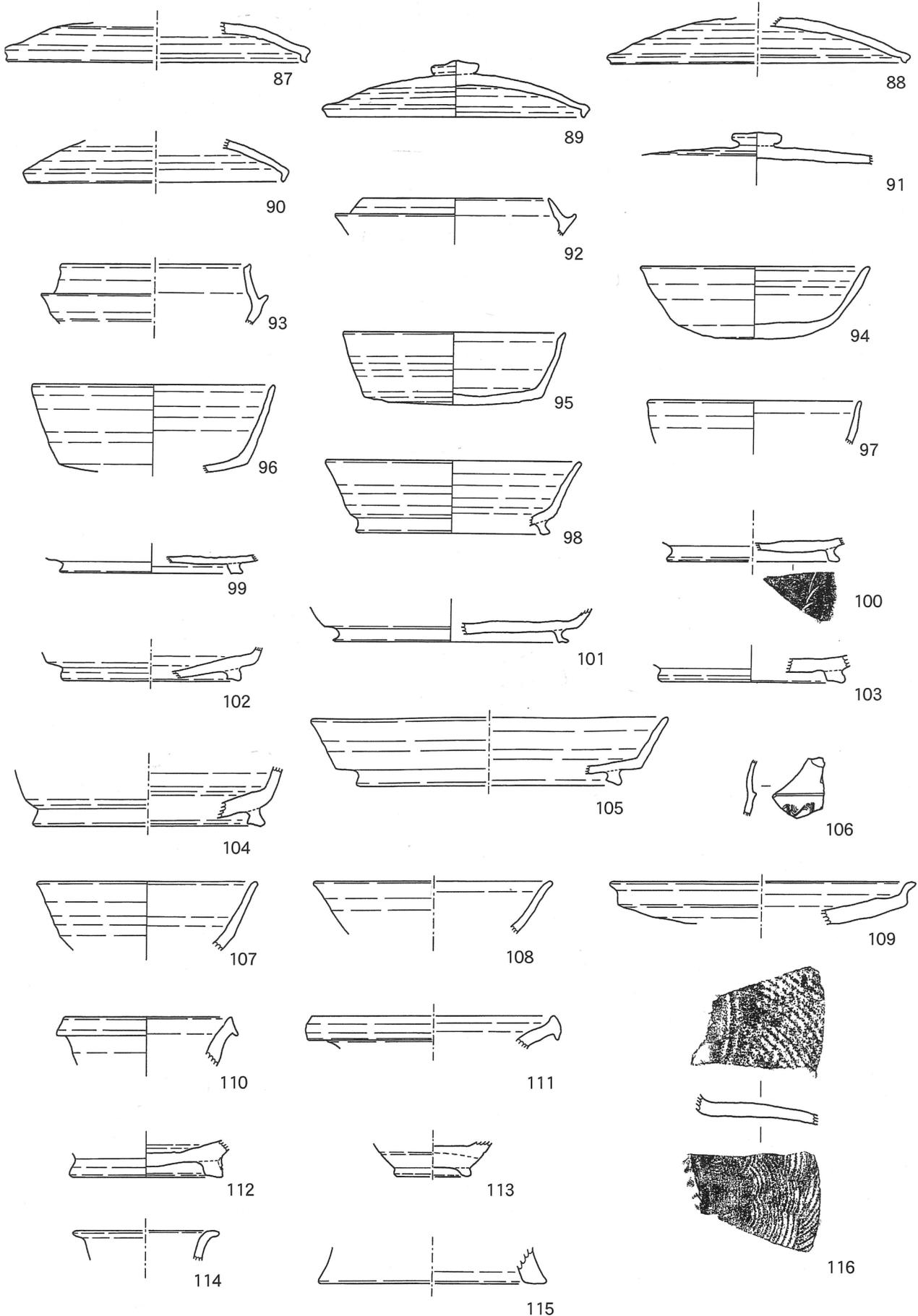


图21 4次調査出土遺物実測図(5) (S=1/3)

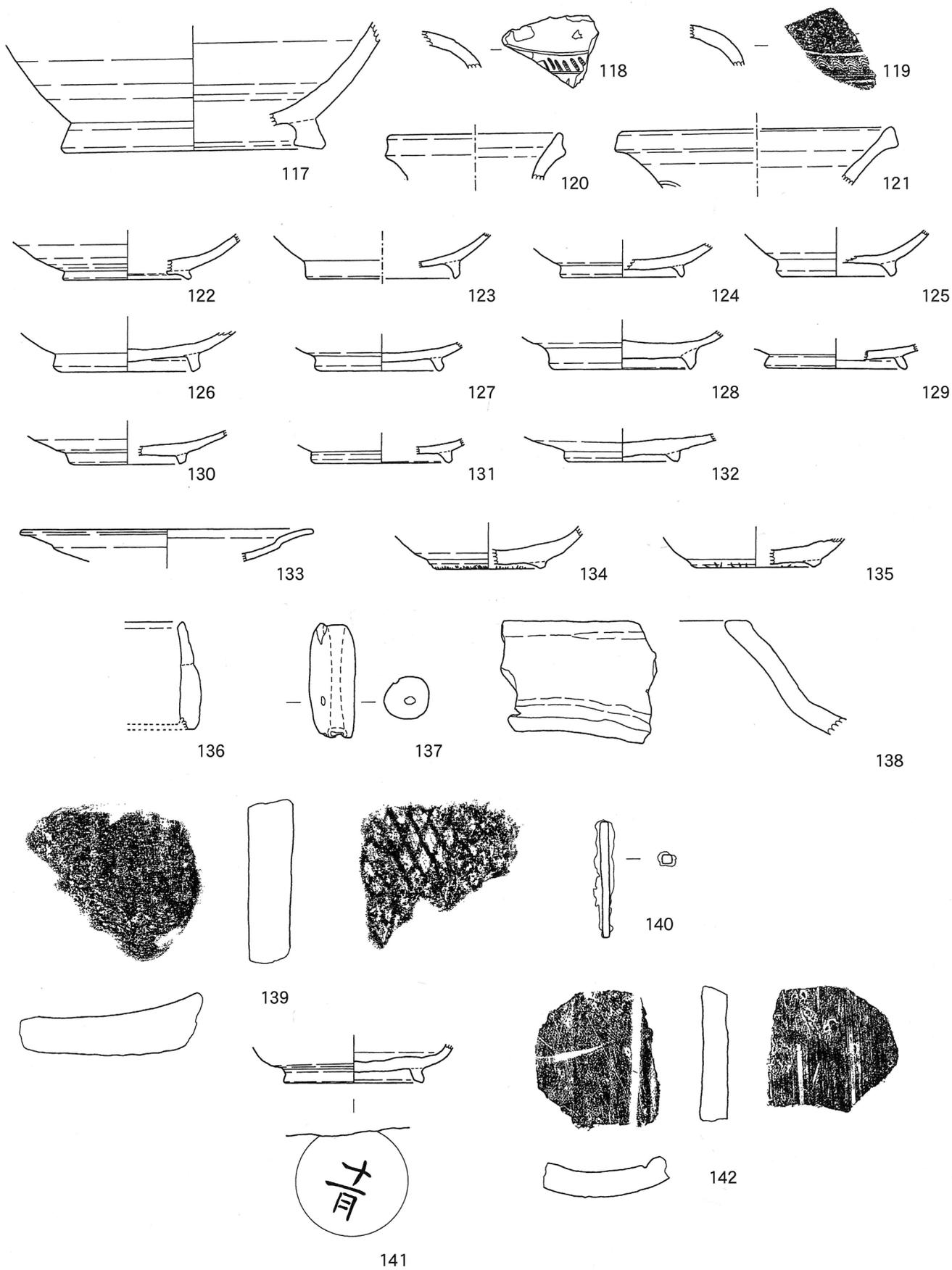


图22 4次調査出土遺物実測図(6) (S=1/3)

No.	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考(調整等)
					口径	器高	底・台径					
1	SH01	f3	土師器	把手				良好	やや粗雑 (φ1~5mmほどの砂粒含む)	淡茶褐色		
2	SH01	f3	須恵器	無台杯			(10.6)	良好	緻密	灰褐色		
3	SH01	f3	須恵器	鉢				良好	緻密	灰黒色		
4	SH01	f3	土製品	移動式カマド				良好	やや粗雑 (φ1mmほどの砂粒含む)	淡橙褐色		内面に煤付着
5	SH01	f3	鉄製品	不明		全長 7.9						
6	SH02	c2	土師器	皿	14.6	2.2	8.6	やや不良	緻密 (φ1~4mmほどの砂粒および赤色粒含む)	橙褐色		
7	SH02	c2	土師器	甕				やや不良	やや粗雑	明橙色		
8	SH02	c3	土師器	鍋			(10.4)	良好	やや緻密 (φ1mmの砂粒含む)	灰茶褐色		
9	SH02	c3	須恵器	無台杯				不良	緻密	淡黄灰色		
10	SH03	b3 c3	土師器	甕				やや不良	やや粗雑	淡橙褐色		
11	SH04	d3	土師器	甕				やや不良	やや粗雑 (0.5~1mmほどの砂粒含む)	淡灰褐色		
12	SH04	c3	須恵器	杯蓋				良好	緻密	暗灰褐色		
13	SH04	c3	須恵器	有台杯	(14.1)		(10.4)	良好	緻密	暗赤褐色		ひずみあり
14	SH04	c3	須恵器	有台杯			(11.5)	やや不良	緻密	橙褐色		
15	SH04	d3	須恵器	無台杯			(6.4)	不良	緻密	淡茶白色		
16	SH04	d3	須恵器	無台杯			(6.0)	不良	緻密	淡茶白色		
17	SH04	c3	土製品	フイゴ羽口				良好	粗雑 (φ2~5mmほどの砂粒を多く含む)	黄灰色		
18	SH05	i6	土師器	甗	(25.7)		(12.4)	良好	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒含む)	橙褐色		
19	SH05	i6	須恵器	有台杯	14.9	4.2	10.6	やや不良	緻密	淡橙白色		黄土塗布
20	SH05	i6	灰釉陶器	碗			(7.2)	良好	緻密	灰白色	灰釉	
21	SH05	i6	山茶碗	小皿				良好	粗雑	灰白色		降灰あり
22	SB01	i21	須恵器	高杯				やや不良	緻密	青灰色		
23	SB01	i21	須恵器	有台杯				やや不良	やや粗雑 (φ1~1.5mmほどの砂粒含む)	灰色		
24	SB01	i20	灰釉陶器	皿				良好	緻密	灰白色	灰釉	
25	SD02	e3	須恵器	杯蓋	(13.7)	2.6		やや不良	緻密	暗灰色		内面底部に印花花文
26	SD02	e3	灰釉陶器	碗			(8.9)	良好	やや粗雑 (φ3~8mmほどの砂粒含む)	灰白色	灰釉	
27	SD03	f2	須恵器	杯蓋				不良	緻密	青灰褐色		
28	SD03	g1	須恵器	無台杯			(5.8)	良好	緻密	淡灰色		
29	SD03	g1	灰釉陶器	碗				良好	緻密	灰褐色	灰釉	
30	SD03	f2	灰釉陶器	碗				良好	緻密	灰褐色	灰釉	
31	SD03	f2	灰釉陶器	皿			6.9	良好	緻密	淡灰色		
32	SK02	b3	土師器	把手				良好	やや緻密 (φ0.5~1mmほどの砂粒含む)	淡茶褐色		

表1 4次調査出土遺物計測表(1)

No.	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考(調整等)
					口径	器高	底・台径					
33	SK02	b3	須恵器	高杯				やや不良	緻密	灰白色		
34	SK04	c2	須恵器	甕				不良	緻密	灰色		
35	SK04	c2	須恵器	甕				良好	緻密	暗灰色		
36	SK08-09	i3	須恵器	杯蓋				良好	緻密	灰色		
37	SK08-09	i3	須恵器	盤			(9.4)	良好	緻密	暗灰色		
38	SK08-09	i3	須恵器	甕				良好	緻密	暗灰色		
39	SK10	i1	土師器	把手				良好	やや緻密 (φ6mmの砂粒、φ2~4mmほどの赤色粒を含む)	淡茶白色		
40	SK11	i5	須恵器	杯蓋				良好	緻密	暗灰褐色		
41	SK12	h5	須恵器	鉢				良好	緻密	黒灰色		
42	SK13	j6	土師器	杯蓋	(14.2)	(3.1)	(8.9)	不良	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を含む)	茶褐色		
43	SK15	j9	土師器	台杯甕				良好	やや粗雑	暗茶褐色		
44	SK15	j9	土師器	甕				不良	緻密	乳白色		
45	SK15	j9	灰釉陶器	碗			(7.1)	やや不良	緻密	灰白色	灰釉	底部外面に墨書あり
46	SK17	j23	土師器	甕				良好	緻密 (φ1mmほどの赤色粒を含む)	淡橙褐色		宇田型甕
47	SK17	j23	土師器	甕	(13.8)			やや不良	緻密	淡茶白色		
48	SK17	j23	須恵器	杯蓋				やや不良	緻密	茶灰色		
49	SX01	b2	灰釉陶器	碗	15.5	5.2	6.8	良好	緻密	灰白色		内面磨耗
50	SX01	b2	灰釉陶器	碗	13.7	4.4	6.5	良好	緻密	灰白色		内面磨耗
51	SX01	b2	灰釉陶器	碗	15.1	4.5	7	良好	緻密	灰白色		
52	SX01	b2	灰釉陶器	短頸壺	5.5	11	5.9	良好	緻密	灰白色		
53	SZ01	i4	土師器	甕	(12.5)			やや不良	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を含む)	灰色		外面体部に被熱痕あり
54	SZ01	i4	土師器	甕				やや不良	やや粗雑 (φ1.5~2mmほどの砂粒を含む)	暗茶褐色		濃尾型甕
55	SZ02	i5	須恵器	杯蓋	(14.6)	4.1		やや不良	緻密	灰白色		
56	SZ02	i5	須恵器	有台杯			(10.5)	良好	緻密	暗灰褐色		
57	SZ02	i5	須恵器	有台杯	(15.0)	5.8	9.1	不良	緻密	淡橙灰色		
58	SZ02	i5	須恵器	無台杯			(5.4)	良好	緻密	暗灰褐色		
59	SZ02	i5	灰釉陶器	深碗			(6.6)				灰釉	
60	SZ02	i5	土製品	志摩式製塩土器				やや不良	粗雑 (φ1~2mmほどの砂粒を含む)	淡橙褐色		
61	Pit1	b1	須恵器	浅鉢				良好	緻密	灰白色		
62	Pit2	e3	土師器	甕				良好	粗雑 (φ1~1.5mmほどの砂粒を多く含む)	暗黄灰色		濃尾型甕
63	Pit3	g3	鉄製品	不明								
64	Pit4	g3	須恵器	無台杯	(12.7)	3.9	(5.2)	良好	緻密	茶灰色		

表2 4次調査出土遺物計測表(2)

No.	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考(調整等)
					口径	器高	底・台径					
65	Pit5	j14	土師器	甕				良好	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を含む)	淡橙褐色		
66	Pit6	j19	須恵器	盤			(10.7)	良好	緻密	茶灰色		
67	包含層	f2	土師器	杯	(12.3)	(3.1)	(6.8)	不良	緻密	淡桃白色		
68	包含層	j15	土師器	甕			(9.1)	良好	緻密 (φ1mmほどの砂粒を少量含む)	淡橙褐色		
69	包含層	i2	土師器	甕	(14.6)			やや不良	緻密 (φ1mmほどの砂粒を少量含む)	橙褐色		
70	包含層	j6	土師器	甕	(27.2)			良好	やや緻密 (0.5mmほどの砂粒を含む)	灰褐色		外面に煤付着
71	包含層	i3	土師器	甕	(22.7)			やや不良	やや緻密 (φ2mm以下の砂粒を少量含む)	淡橙褐色		
72	包含層	i4	土師器	甕				やや不良	緻密	淡橙褐色		
73	包含層	d2	土師器	甕				やや不良	緻密	淡黄褐色		
74	包含層	b3	土師器	甕				良好	やや緻密 (0.5mmほどの砂粒を多く含む)	茶褐色		
75	包含層	b3	土師器	甕				やや不良	やや緻密 (0.5mmほどの砂粒を多く含む)	茶褐色		
76	包含層	i5	土師器	甕	(18.3)			良好	やや緻密 (0.5mmほどの砂粒を少量含む)	暗茶褐色		
77	包含層	f3	土師器	甕				やや不良	緻密	橙褐色		
78	包含層	i5	土師器	鍋				やや不良	緻密	淡茶白色		
79	包含層	f3	土師器	甗				やや不良	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を含む)	橙褐色		
80	包含層	i6	土師器	把手				良好	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を含む)	淡橙褐色		
81	包含層	j21	土師器	把手				不良	緻密	淡茶白色		
82	包含層	j23	須恵器	杯蓋				良好	緻密	暗灰色		
83	包含層	j21	須恵器	杯蓋				良好	やや粗雑 (φ1mmほどの砂粒を多く含む)	暗灰色		
84	包含層	i21	須恵器	杯蓋				良好	緻密	灰白色		
85	包含層	j23	須恵器	杯蓋				良好	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を含む)	暗灰色		
86	包含層	f3	須恵器	杯蓋				良好	緻密	灰白色		降灰あり
87	包含層	i5	須恵器	杯蓋				良好	緻密	灰色		降灰あり・重ね焼き痕あり
88	包含層	i4	須恵器	杯蓋				良好	緻密	橙褐色		
89	包含層	f3	須恵器	杯蓋	14.0	3.1		良好	緻密	暗紫灰色		
90	包含層	h2	須恵器	杯蓋				良好	緻密 (φ0.5mmほどの砂粒を少量含む)	灰色		
91	包含層	a3	須恵器	杯蓋				やや不良	やや緻密 (φ2mmほどの砂粒を少量含む)	淡橙灰色		
92	包含層	j5	須恵器	杯身				良好	緻密	灰色		
93	包含層	i6	須恵器	杯身				良好	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を少量含む)	暗灰色		
94	包含層	i4	須恵器	無台杯	(12.4)	4.0	4.4	やや不良	やや緻密 (φ0.5mmほどの砂粒を少量含む)	暗橙褐色		
95	包含層	e3	須恵器	無台杯	(11.9)	(4.0)	(9.4)	やや不良	緻密	橙灰色		
96	包含層	f3	須恵器	無台杯	(13.2)		(10.3)	良好	やや緻密 (φ2mmほどの砂粒を含む)	淡茶白色		

表3 4次調査出土遺物計測表(3)

No.	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考(調整等)
					口径	器高	底・台径					
97	包含層	i6	須恵器	無台杯	(11.6)			良好	緻密	灰色		
98	包含層	i2	須恵器	有台杯	(13.8)	(4.1)	(10.2)	良好	緻密	暗灰色		
99	包含層	d1	須恵器	有台杯			(9.8)	良好	やや緻密 (φ1mmほどの砂粒を少量含む)	青灰色		
100	包含層	b3	須恵器	有台杯				良好	緻密	灰褐色		外面底部に爪先での圧痕あり
101	包含層	b3	須恵器	有台杯			(12.6)	不良	緻密	灰白色		ひずみあり、降灰あり
102	包含層	e3	須恵器	有台杯				良好	緻密	茶灰色		
103	包含層	g3	須恵器	有台杯			(9.7)	良好	緻密	灰色		
104	包含層	a3	須恵器	有台杯				やや不良	緻密	淡灰色		
105	包含層	i5	須恵器	有台杯				良好	緻密	灰色		
106	包含層	c3	須恵器	無蓋高杯				良好	緻密	暗灰色		波状文あり
107	包含層	i21	須恵器	碗				やや不良	緻密	淡灰色		
108	包含層	i4	須恵器	碗				良好	緻密	灰褐色		
109	包含層	i5	須恵器	盤				不良	やや緻密 (φ1.5mmほどの砂粒を含む)	淡茶灰色		
110	包含層	g3	須恵器	長頸瓶	(9.2)			良好	緻密	淡灰色		黄土塗布
111	包含層	j23	須恵器	長頸瓶				良好	緻密	淡灰色		降灰あり
112	包含層	j8	須恵器	長頸瓶			8.1	良好	緻密	灰白色		降灰あり
113	包含層	i3	須恵器	ミニチュア長頸瓶				良好	緻密	淡灰色		降灰あり
114	包含層	i5	須恵器	多口瓶				良好	緻密	淡茶灰色		降灰あり
115	包含層	j5	須恵器	台付長頸瓶				良好	緻密	橙褐色		
116	包含層	d3	須恵器	台付長頸瓶				良好	緻密	灰白色		降灰あり
117	包含層	i19	須恵器	短頸壺			(14.3)	良好	緻密	暗灰色		降灰あり
118	包含層	i24	須恵器	罌				やや不良	やや緻密	青灰色		列点文
119	包含層	j19	須恵器	罌				良好	緻密	暗紫灰色		波状文
120	包含層	b3	須恵器	横瓶				良好	緻密	灰褐色		降灰あり
121	包含層	i21	須恵器	壺				良好	緻密	淡茶白色		波状文・黄土塗布
122	包含層	i5	灰釉陶器	碗			(6.8)	良好	緻密	灰白色		
123	包含層	g1	灰釉陶器	碗				良好	緻密	灰白色		
124	包含層	j16	灰釉陶器	碗			(6.7)	良好	緻密	淡灰色	灰釉	
125	包含層	g3	灰釉陶器	碗			(6.2)	良好	緻密	淡茶白色		
126	包含層	i4	灰釉陶器	碗			7.3	良好	緻密	淡黄白色		
127	包含層	h1	灰釉陶器	碗			6.4	良好	緻密	淡黄白色		
128	包含層	h1	灰釉陶器	碗			(7.6)	良好	緻密	灰白色		

表4 4次調査出土遺物計測表(4)

No.	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考(調整等)
					口径	器高	底・台径					
129	包含層	a3	灰釉陶器	皿			(7.7)	良好	緻密	淡茶白色		
130	包含層	g2	灰釉陶器	皿			(5.9)	良好	緻密	青白色	灰釉	
131	包含層	f2	灰釉陶器	皿			(7.5)	不良	緻密	淡茶白色		
132	包含層	g2	灰釉陶器	皿			6.1	良好	緻密	灰白色	灰釉	
133	包含層	d3	灰釉陶器	段皿	(16.1)			良好	緻密	灰白色	灰釉	
134	包含層	i23	山茶碗	碗			(5.8)	良好	やや緻密 (φ0.5mmほどの砂粒を少量含む)	灰白色		靱殻痕
135	包含層	b3	山茶碗	碗			6.6	やや不良	やや緻密	淡茶白色		降灰あり、靱殻痕・指圧痕
136	包含層	j26	土製品	志摩式製塩土器			6.1	やや不良	粗雑 (φ1~2mmほどの砂粒を多く含む)	淡黄褐色		
137	包含層	d3	土製品	土錘	長さ6.3	幅2.5	孔径0.5	良好	緻密	橙褐色		重量37.2g
138	包含層	i6	土製品	移動式カマド				良好	やや粗雑	淡茶褐色		
139	包含層	j19	瓦	平瓦				不良	緻密 (φ1mmほどの赤色砂粒含む)	明橙褐色		凹面に布目痕、凸面に斜格子タタキ
140	包含層	j4	鉄製品	釘	長さ6.6							
141	表探		須恵器	有台杯			7.6	良好	緻密	灰色		「十一月」墨書土器
142	表探		瓦	平瓦				良好	緻密 (φ1~2mmほどの白色砂粒含む)	灰色		凹面に布目痕

備考 法量は、反転復元して求めた数値の場合カッコ書きで記した。残存率が、6分の1以下のものについては、反転復元図を載せていても中心線を破線にして区別し、一覧表では法量を記していない。焼成は良好・やや不良・不良の三段階で、胎土は緻密・やや緻密・やや粗雑・粗雑の四段階で示した。6次調査の一覧表もこれと同じ。

表5 4次調査出土遺物計測表(5)

# 第3章 第5次調査

## 第1節 調査区と層位

町道小山線の改良工事に伴って調査を行った。4次調査と道を挟んで反対側に位置する。南端が標高27.4 mで最も高く、北側は27.0 mである。調査区中央部が低く、26.7 mである。

層位は4次調査に比べ表土下の包含層がはっきりとせず、直接地山となる部分も存在する。

## 第2節 遺構

第5次調査は、約50 m<sup>2</sup>と極めて狭い範囲であったため、Pit66箇所と溝2条を検出したのみであった。Pitでは一ヶ所、貝が多数出土した。(図26)

## 第3節 遺物

出土遺物は、小破片のみで実測可能な遺物はない。遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

(石神教親)

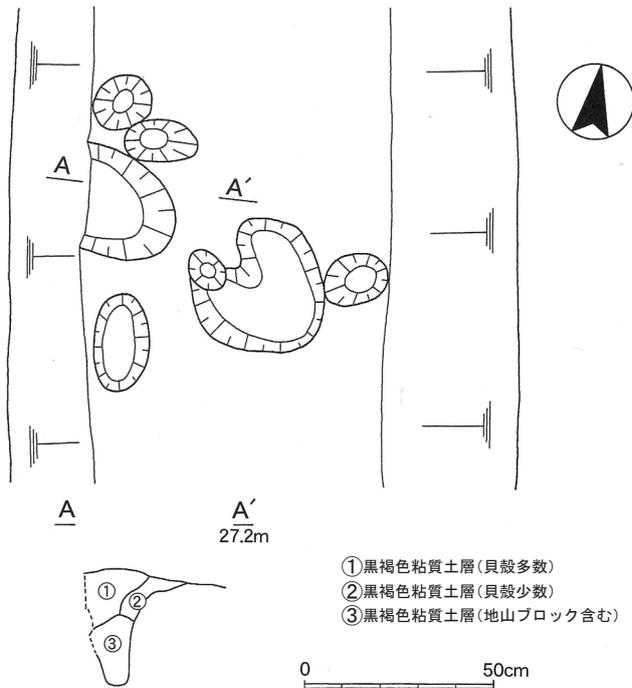


図24 5次調査貝殻出土Pit平面断面図 (S=1/20)

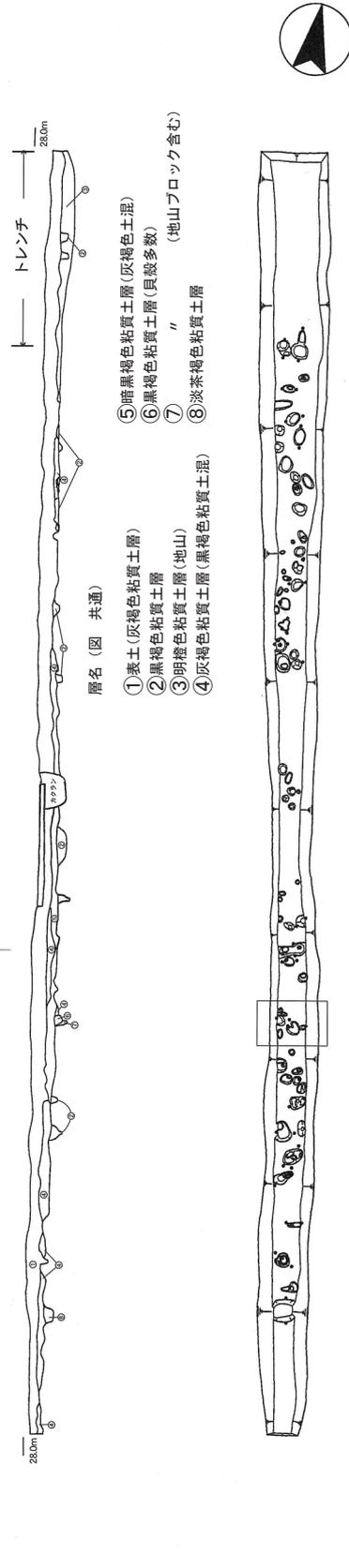


図23 5次調査平面・断面図 (S=1/200)

## 第4章 第6次調査

### 第1節 調査区と層位

町道小山・多度駅線の新設工事に伴う調査で、4次調査の続きとして行った。4次調査同様に北に向かって緩やかに傾斜している。調査区の中央部に排水溝があり、そのままの状態で行わなければならなかったため、東西の調査区に分けて掘削した。以下では、それぞれ東トレンチ・西トレンチと呼称する。

層位は、4次調査とほぼ同じで、表土・包含層・地山となる。

### 第2節 遺構

排水溝を挟んだ東西のトレンチから、溝、土壇、ピットを検出した。調査区北側は礫層が続いたため、範囲を縮小した。ピットは径0.3～0.4mを中心に54個を検出したが、掘立柱建物を確認することはできなかった。

以下、遺構ごとに記していくことにする。

#### SD 01

東トレンチの中央やや北寄りに位置する東西方向の溝である。幅は上端2.3m、下端1.9mで、深さは0.2mと浅い。溝内の埋土は黒褐色粘土質の一層で、床面は拳大ほどの石を含む礫層である。西から東に向けて緩やかに傾斜しており、集落等の区画溝ではなく自然流路と考えられる。

出土遺物は、土師器、須恵器である。

#### SD 02

東トレンチの中央やや南寄りに位置する南北方向の溝である。幅は上端0.15m、深さ0.07mと非常に小さい。少量だが土師器、須恵器が出土している。

#### SK 01

東トレンチのほぼ中央、東寄りで検出された。西から東に向けて緩やかに傾斜している。検出面で、上端幅0.8～0.9m、深さ0.1mほどであった。埋土は黒褐色の混ざった暗茶褐色粘土質の一層で、東トレンチ東側の断面で0.35mほどの厚みがあるので、元はこの程度の深さを持つ土壇もしくは東西方向の溝であったと思われる。

出土遺物は土師器、須恵器である。

#### SK 02

西トレンチの中央に位置する。東端、西端ともに調査区外にのびているので、全体の形状は不明。南北方向で幅約2m、検出面からの深さは、深い所で0.5mを測る。東壁の埋土中から、土師器の高杯の脚部が出土するなど、土師器を中心に小片ながら出土点数は多い。埋土は地山直上に拳大の石が数個確認されるものの、黒褐色粘土一層である。

出土遺物は土師器、須恵器である。

#### SK 03

西トレンチSK02のすぐ北側に位置する。北端部にはさらに0.15mほど掘り窪めたピット状の遺構が存在する。東側は調査区外にのびているが、検出状況では西側に尖った三角形状を呈している。上端幅は最大で0.85m、検出面からの深さは0.1m、ピット状の所で0.25mを測る。

出土遺物は土師器、須恵器である。

#### SK 04

西トレンチの南端に位置する。北側の端のみの検出のため、全体の規模は不明。埋土は黒褐色粘土質土一層で、検出面から深い所で0.25cmを測る。

少量であるが、土師器・須恵器が出土している。

### 第3節 遺物

6次調査では、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瀬戸美濃陶器、瓦が出土している。そのうち土師器が全体の9割以上を占め、わずかな量で須恵器、灰釉陶器が続くという様相を示している。

#### (1) 遺構出土遺物

##### SD 01

土師器の杯・高杯・甕・甌・須恵器の杯身・高杯・甕などが出土しているがいずれも小破片である。

##### 土師器

台付甕(1～4) 台付甕の口縁部と台部である。口縁部は端部を外側につまみ出し、上端に面を持つ宇田型台付甕である。台部は、器壁が薄く端部を折り返したものと、やや厚いものがある。

甌(5) 円柱状の把手で、甌のものと思われる。土師器の把手にはあまりない形状で、韓質土器の甌を真似たものであろうか。

##### 須恵器

高杯(6) 高杯の脚部で、ヘラ切りによる透かし

孔がある。猿投窯編年のⅡ期中段階にあたる。

#### SD 02

土師器の甕、須恵器の瓶類と思われる小破片が出土しているが、図化できるものはない。

#### SK 01

土師器の高杯・甕、須恵器の杯・甕の小破片が出土している。

土師器

甕(7～9) 甕の口縁部で、いずれも口端部をつまみ上げているため、伊勢型甕と思われる。

須恵器

長頸瓶(10) 瓶類の口縁部である。ここでは長頸瓶とした。灰白色を呈し、外面に一稜の突線がめぐる。猿投編年Ⅲ期中段階にあたる。

#### SK 02

土師器の高杯・甕・小形丸底壺、須恵器の杯・甕、山茶碗の小皿が出土している。

土師器

小形丸底壺(11) 強く湾曲した体部から外方向に直線的に伸びる口縁部をもつ。口縁端部、底部が欠損しているが、小形丸底壺と思われる。内外面ともにユビナデによる調整が施されていて、器壁は薄い。廻間期のもので、4世紀代に溯るものと考えられる。

台付甕(12～16) S字状口縁台付甕(12～14)、くの字状口縁台付甕(15)、宇田型台付甕(16)の口縁部破片である。S字状口縁台付甕には、口縁部の屈曲が強く、外面に沈線をもつもの(12・13)と、口縁端部に面をもつもの(14)がある。くの字状口縁台付甕は肥厚した頸部から外反させる口縁をもち、体部外面にナナメハケ、頸部内面にヨコハケを施す。宇田型台付甕は、頸部から口縁を外反させて、口端部をヨコナデして面をもたせている。

高杯(17～20) 17は西トレンチ東壁から出土した。脚部内面にしぼり込むような痕跡が残る。外面はやや摩耗しているが、タテ方向にナデののち、脚部の屈曲部をヨコナデしている。18は屈折脚高杯の脚部である。小破片だが、強く外反させたのち、端部を折り曲げて接地面としている。19は有稜高杯の杯部である。器壁が薄く、淡黄橙色を呈する。20は杯身の口縁部だが、出土状況から高杯の杯部と考えられる。

須恵器

杯身(21) 須恵器の杯身である。口縁端部が欠損しているが、7世紀のものと考えられる。

山茶碗

小皿(22) 口縁部の小破片が一点出土した。包含層からの混入と考えられる。

#### SK 03

土師器の甕など、破片点数は少ないが、比較的残りの良いものが出土した。

土師器

台付甕(23～25) 宇田型台付甕の口縁部と底部である。23・24は、ともに厚みのある体部から直線的に外側に引き出した口縁部の先端を、面をもたせるようにヨコナデして成型している。体部外面にはナナメハケを施し、体部内面、口縁部にはヨコナデをして仕上げている。口縁径は推定でともに13.6cmだが、胎土や焼成の違いから、同一個体ではないと判断した。25は、体部から台部にかけての破片である。ヨコナデによって成型された台部から、薄手の体部が引き上げられている。調整は摩耗により不明だが、23もしくは24と同一のものと考えられる。

#### Pit 1

東トレンチ中央部のPit1から滑石製の有孔円盤(26)が出土した。径3.7cm、厚さ3.5～5.0mmほどで、両端に径1.0mmほどの穴が開いている。また、両面に研磨痕と思われる線状の痕跡が見られる。県内では、津市の六大A遺跡、松阪市の阿形遺跡、青山町の花代遺跡などに類例がみられる。祭祀などの行事に使用されたものである。

#### (2) 包含層出土遺物(27～57)

土師器、須恵器、灰釉陶器、瀬戸美濃陶器、瓦などが出土している。SD 01・SK 02・SK 03直上の包含層からの出土が多く、東トレンチの両端にいくほど遺物量が少ない様相を示している。

#### 土師器

台付甕(27～29) 宇田型台付甕の口縁部である。摩耗により調整は不鮮明だが、厚めの体部から外側に引き伸ばして口縁をつくり、丸みをもたせて口端部を成形している。28・29は台部の破片である。ともにユビナデによる成形がなされている。29は、端部を内側に折り返している。

皿(30) 内外面摩耗が激しいが、土師器皿の口縁部破片である。

甕(31) 甕の口縁部である。ゆるやかに外反する口縁の端部を上につまみ上げるように尖らせている。

高杯(32～35) 32は高杯の破片である。脚部内面には絞り込むような痕跡が見られ、外面はナデで調整されている。33～35は脚部の破片で、いずれも屈折脚高杯と考えられる。端部を折り曲げて接地面としている。

### 須恵器

杯蓋(36～42) 須恵器の杯蓋だが、小破片のため径を復元できるものが少ない。36は肩部に稜をもち、口縁部はつまみ出したように小さく外反する。猿投窯編年のⅢ期中段階にあたる。37～42はいずれも小破片である。37はⅡ期古段階、38～40はⅡ期新段階、41はⅢ期中段階～新段階、42はⅣ期古段階に比定される。

杯身(43～49) 43は口縁端部が欠損しているが底部を回転ヘラケズリで成形している。45・46はやや直線的な体部をもち、底部にはヘラ切り痕がみられる。在地産のものであろう。47～49はいずれも無高台の坏で、49は回転糸切り痕を残す。猿投窯編年では、43・44がⅡ期中段階～新段階、45・46は7世紀ごろ、47～49は8世紀ごろに比定される。

高杯(50) 高杯の脚部破片と思われる。外側に明瞭な稜をもつ。猿投窯編年Ⅲ期中段階に比定される。

甕(51・52) 甕の口縁部と思われる。51は直線的な口縁の外側に二条の沈線、その下に櫛描き波状文が施文されている。52は返りのついた口縁をもち、端部は面的に仕上げられている。51は7～8世紀、52は9世紀ごろに比定される。

### 灰釉陶器

碗(53～57) いずれも小破片である。53は直線的に立ち上がる碗の口縁部で、内外面に施釉がされている。54は、厚い器壁に角高台が貼り付き、内面が施釉されている。55は接地面がやや内側に湾曲している。内面に施釉痕が見られる。56は高い三日月高台が付き、施釉痕は見られない。57は外底面に回転糸切り痕を残す。猿投窯編年では、53～55がⅥ期古段階、56がⅥ期新段階～Ⅶ期古段階、57がⅦ期に比定される。

### (3) 試掘調査出土遺物と表採遺物

天王平遺跡6次調査に際して、事前に4か所の試掘調査を行った。また、その時遺物の表採も行い、あわせてコンテナ1箱ほどの遺物を取り上げた。

### 土師器

把手付き鍋(58) 第4試掘壙(SD01よりやや南に位置する)から出土した。全体をユビナデで調整している。把手付き鍋の把手部分と考えられる。

甕(59) 第4試掘壙から出土。口縁端部が欠損しているが伊勢型の甕と考えられる。

### 須恵器

杯身(60～61) 第4試掘壙から出土。60・61ともに口縁部が欠損している。底部は回転ケズリ、ほかは回転ナデで成型されている。猿投窯編年では、60は古墳期、61はⅡ期新段階～Ⅲ期古段階に比定される。

甕(62) 表面採集で、頸部から緩やかに外反させて、口端部に面を持たせるように仕上げている。

### 灰釉陶器

碗(63) 第4試掘壙から出土。器壁が薄く、端部を小さく外反させている。全面に施釉がされており、猿投窯編年のⅥ期新段階に比定される。

### 小結

6次調査では、狭い範囲ながらも台付甕などの土師器を主体とした多くの遺物が出土した。本調査は、1～4次調査などと比べてやや北に位置し、4～6世紀代の遺物がほとんどで、南よりも古い様相を示していた。今回、竪穴式住居や掘立柱建物は確認されなかったが、遺物でみる限り、天王平遺跡内で北から南への生活空間の移動があったと考えられる。

また、ミニチュア土器や有孔円盤が出土し、天王平遺跡の性格を考える上で貴重な資料を得ることができた。

(松田繁)

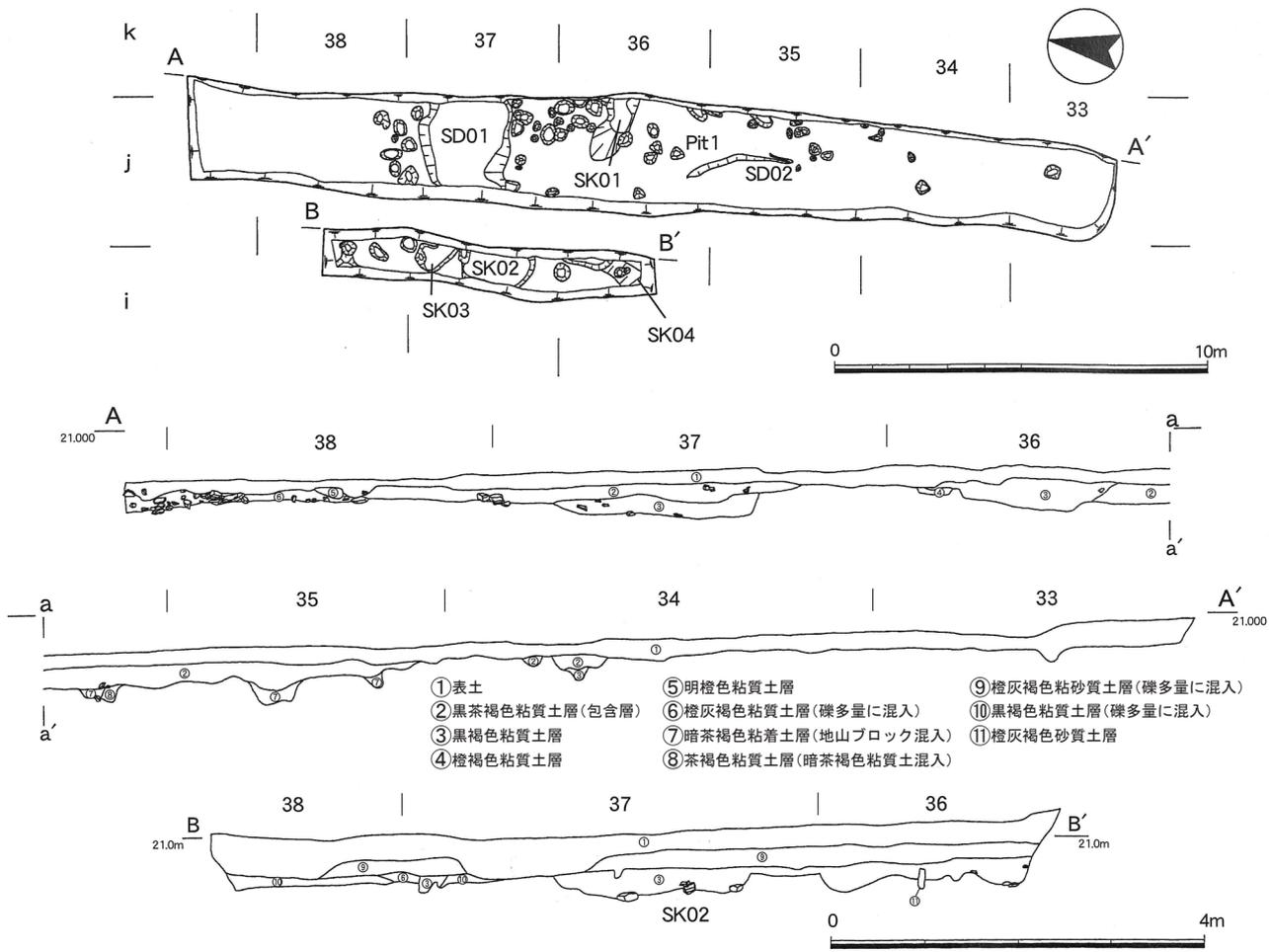


図25 6次調査遺構図(S=1/200)及び土層断面図(S=1/80)

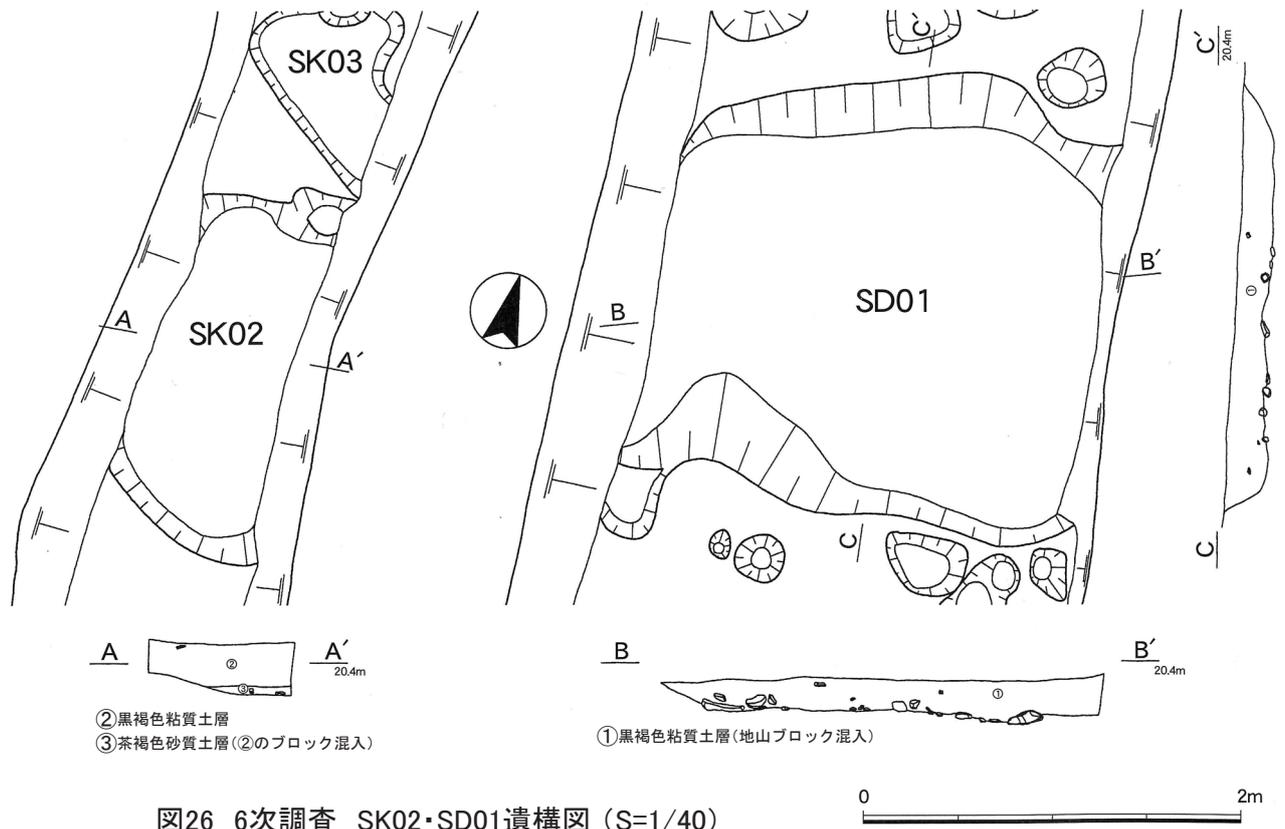


図26 6次調査 SK02・SD01遺構図(S=1/40)

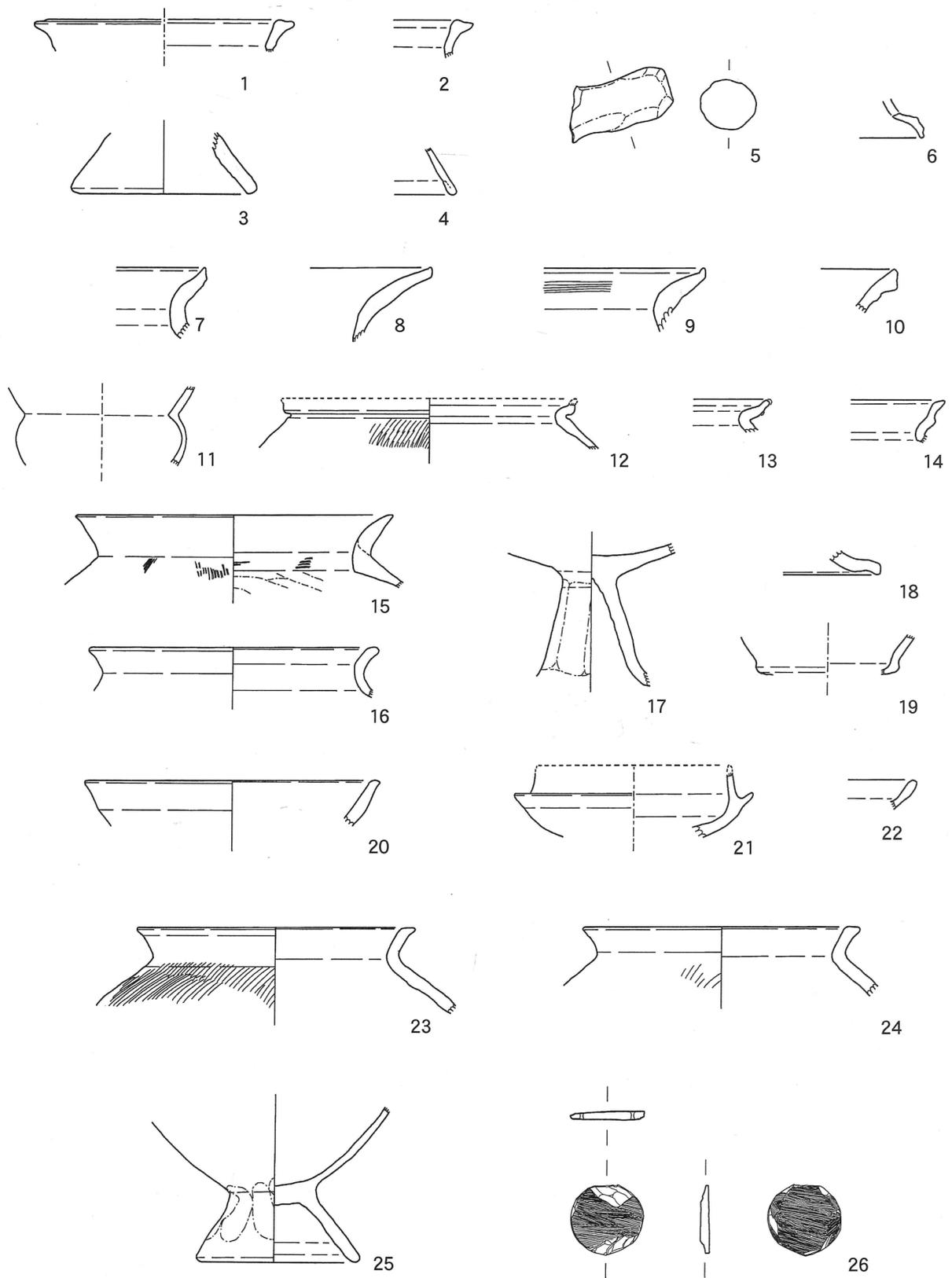


図27 6次調査出土遺物実測図(1) (S=1/3、26のみ1/2)

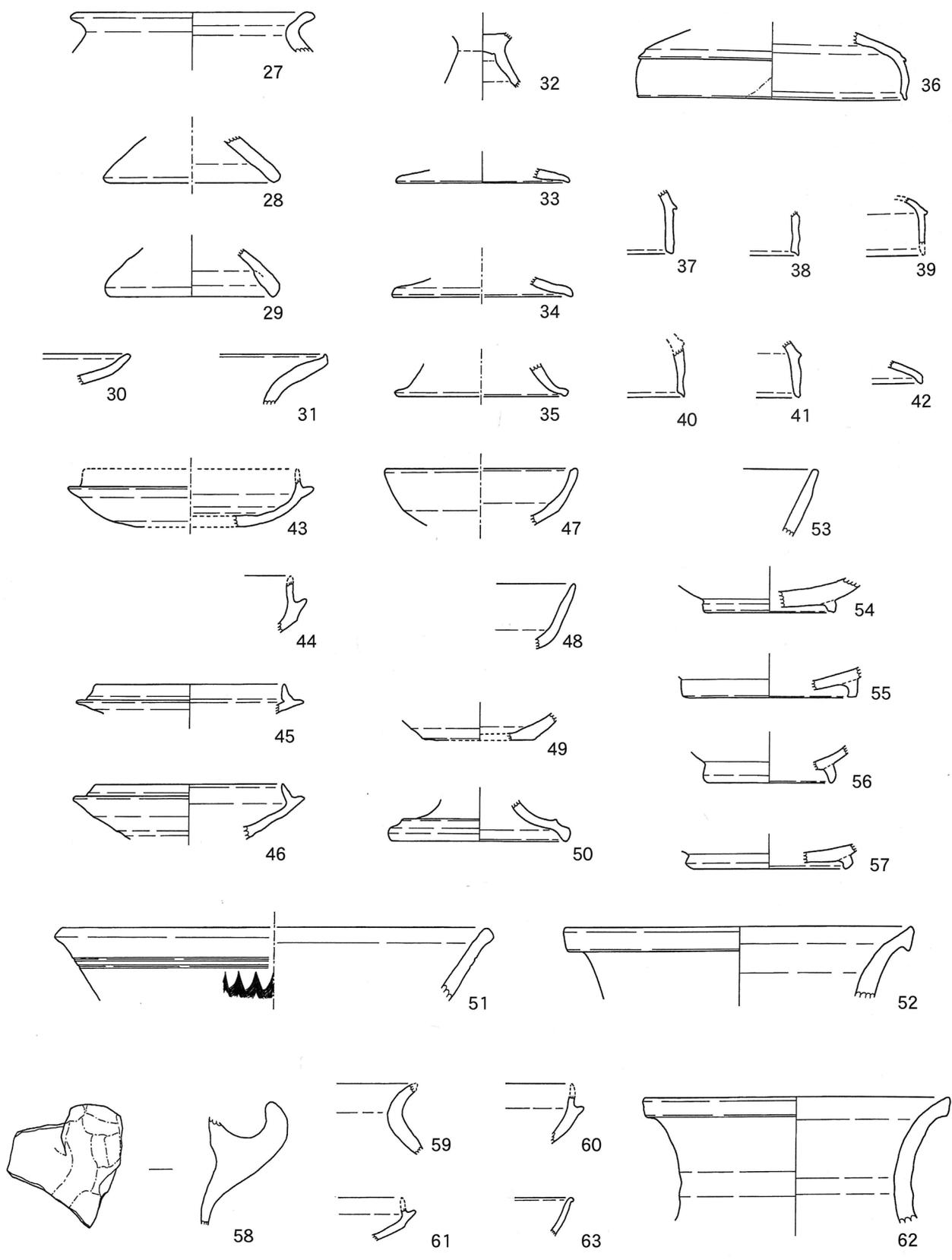


图28 6次調査出土遺物実測図(2) (S=1/3)

No.	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考(調整等)
					口径	器高	底・台径					
1	SD01	j37	土師器	台杯甕				良好	やや粗雑	淡橙褐色		宇田型
2	SD01	j37	土師器	台杯甕				良好	やや粗雑	淡橙褐色		宇田型
3	SD01	j37	土師器	台杯甕			(8.6)	良好	緻密	淡黄褐色		
4	SD01	j37	土師器	台杯甕				良好	緻密	橙褐色		
5	SD01	j37	土師器	甌				良好	緻密	淡橙褐色		把手部のみ
6	SD01	j37	須恵器	高杯				良好	緻密 (φ2.0mmの白色砂粒を多く含む)	灰白色		自然降灰あり、透かしあり
7	SK01	j36	土師器	甕				やや不良	やや粗雑 (φ1.5mmの砂粒多く含む)	淡黄灰色		伊勢型
8	SK01	j36	土師器	甕				やや不良	やや粗雑	明橙色		伊勢型
9	SK01	j36	土師器	甕				不良	やや粗雑 (φ2.0mmの砂粒多く含む)	白色		伊勢型、口縁部内面ヨコハケ(6本/cm)
10	SK01	j36	須恵器	瓶類				良好	やや緻密	淡灰色		
11	SK02	i37	土師器	小型丸底甕				やや不良	やや粗雑	淡橙色		
12	SK02	i37	土師器	台杯甕				良好	やや粗雑	暗黄灰色		体部ナナメハケ(5本/cm)
13	SK02	i37	土師器	台杯甕				良好	やや粗雑	黄灰褐色		S字甕
14	SK02	i37	土師器	台杯甕				良好	やや粗雑	黄灰褐色		S字甕
15	SK02	i37	土師器	台杯甕?	(15.8)			良好	やや緻密 (φ2.0mmの砂粒多く含む)	淡黄灰色		
16	SK02	i37	土師器	台杯甕?	(14.0)			良好	やや粗雑	淡黄灰色		
17	SK02	i37	土師器	高杯				良好	やや緻密	明橙色		
18	SK02	i37	土師器	高杯				良好	やや緻密	暗灰色		
19	SK02	i37	土師器	有稜高杯				良好	やや緻密	淡黄橙色		
20	SK02	i37	土師器	高杯				良好	やや緻密	明橙色		
21	SK02	i37	須恵器	杯身				良好	緻密	暗灰色		
22	SK02	i37	山茶碗	小皿				良好	緻密	灰白色		自然降灰あり
23	SK03	i37	土師器	台杯甕	(13.6)			やや不良	やや粗雑	淡橙白色		体部ナナメハケ(4本/cm)
24	SK03	i37	土師器	台杯甕	(13.6)			やや不良	粗雑 (φ1.5mmの砂粒多く含む)	淡橙灰色		体部ナナメハケ(3~4本/cm)
25	SK03	i37	土師器	台杯甕				良好	やや粗雑	淡橙灰色		
26	Pit1	j36	石製品	有孔円盤	径3.7					黒		2ヶ所に穿孔、両面に研磨痕
27	包含層	i37	土師器	台杯甕	(11.8)			良好	やや緻密 (φ4.0mmの砂粒含む)	淡黄橙色		
28	包含層	j37	土師器	台杯甕			(8.4)	良好	やや粗雑 (φ4.0mmの砂粒含む)	淡黄灰色		
29	包含層	j38	土師器	台杯甕			(8.4)	良好	やや粗雑	淡黄灰色		
30	包含層	j35	土師器	皿				良好	やや緻密 (φ2.0mmの砂粒含む)	橙褐色		
31	包含層	j37	土師器	甕				良好	やや粗雑	淡橙灰色		伊勢型
32	包含層	j37	土師器	高杯				良好	やや緻密	黄橙褐色		

表6 6次調査出土遺物計測表(1)

No.	遺構名	Gr	種類	器種	法量 (cm)			焼成	胎土	色調	釉薬	備考(調整等)
					口径	器高	底・台径					
33	包含層	j35	土師器	高杯				良好	やや緻密	明橙色		
34	包含層	j37	土師器	高杯				やや不良	やや粗雑	明橙色		
35	包含層	i38	土師器	高杯				やや不良	やや粗雑	明橙色		
36	包含層	j36	須恵器	杯蓋				良好	緻密	灰白色		自然降灰あり
37	包含層	i38	須恵器	杯蓋	(13.8)			良好	緻密	暗灰色		
38	包含層	j36	須恵器	杯蓋	(11.2)			良好	緻密	暗青灰色		
39	包含層	j37	須恵器	杯蓋				良好	緻密	暗灰白色		
40	包含層	j37	須恵器	杯蓋				良好	緻密	暗灰白色		
41	包含層	i36	須恵器	杯蓋				不良	やや粗雑	灰白色		
42	包含層	i36	須恵器	杯蓋				良好	緻密	暗青灰色		自然降灰あり
43	包含層	j37	須恵器	杯身				良好	緻密	青灰色		
44	包含層	j36	須恵器	杯身				良好	緻密	灰褐色		
45	包含層	j35	須恵器	杯身	(9.8)			良好	緻密	灰白色		
46	包含層	j36	須恵器	杯身	(9.7)			良好	緻密	灰白色		
47	包含層	j37	須恵器	杯身	(9.8)			良好	緻密	青灰色		
48	包含層	i37	須恵器	杯身				良好	緻密	灰褐色		
49	包含層	i37	須恵器	杯身			(5.6)	良好	緻密	橙褐色		
50	包含層	i37	須恵器	高杯			(8.8)	良好	緻密	灰褐色		自然降灰あり
51	包含層	j36	須恵器	甕	(21.8)			良好	緻密	暗灰褐色		
52	包含層	j36	須恵器	甕	(17.8)			良好	緻密	暗灰色		
53	包含層	i37	灰釉陶器	碗				良好	緻密	淡黄灰色	灰釉	
54	包含層	i36	灰釉陶器	碗			(6.6)	良好	緻密	灰白色	灰釉	内面前面に施釉
55	包含層	i37	灰釉陶器	碗			(8.4)	良好	緻密	黄灰褐色	灰釉	内面刷毛塗りで施釉
56	包含層	i38	灰釉陶器	碗			(6.4)	良好	緻密	灰白色		内面使用痕あり
57	包含層	i37	灰釉陶器	碗			(8.0)	良好	緻密	灰白色		
58	試掘調査	j36	土師器	把手付鍋				良好	緻密 (φ1.0mmの砂粒を多く含む)	淡橙白色		
59	試掘調査	j36	土師器	甕				やや不良	やや粗雑	淡橙白色		
60	試掘調査	j36	須恵器	杯身				良好	緻密	淡灰色		
61	試掘調査	j36	須恵器	杯身				良好	緻密	暗灰褐色		自然降灰あり
62	表採		須恵器	甕	(15.6)			良好	緻密	青灰色		
63	試掘調査	j36	灰釉陶器	碗				良好	緻密	淡黄褐色	灰釉	

表7 6次調査出土遺物計測表(2)

## 第5章 結語

### 第1節 遺構について

#### (1) 遺構の変遷

4次調査では、8世紀から9世紀にかけての遺構・遺物が確認された。これは、近接する1・2・3次調査とほぼ同様の結果である。これに対して、6次調査では、4～6世紀の遺構・遺物が中心であり、明らかに時期が異なる結果であった。4次調査でも、6次調査区に近いSK 17では他の遺構とは違い、6世紀代の遺物が出土している。

これまでの調査においては、古墳時代の明確な遺構は検出されていなかった。天王平遺跡内で、古墳時代に属する遺構・遺物がまとまって確認されたのは6次調査が初めてであり、その意義は大きい。SK 02からは4～6世紀の土師器が出土し、SD 01は6世紀前葉の須恵器高杯、SK 01は6世紀末～7世紀初頭の須恵器長頸瓶が出土している。6次調査区では、8世紀以降の遺物は包含層からは出土するものの、遺構は検出されていない。時代を経るに従い、居住域の中心が南へ移ったと考えられる。今後、6次調査の近接地で調査が行われれば住居跡などが見つかる可能性は高い。

4次調査区での竪穴住居は、5基検出された。SH 02～05は、凡そ8世紀前半におさまり、SH 05は7世紀末に遡る可能性もある。SH 01はやや新しく8世紀後半ごろの竪穴住居である。年代としては、これまでの調査で検出された竪穴住居の時期とほぼ同じである。掘立柱建物(SB 01)は、出土した灰釉陶器から9世紀中葉のものである。他の調査においても、掘立柱建物は9世紀以降に属し、8世紀に遡るものは確認されていない。天王平遺跡での竪穴住居から掘立柱建物への移行は9世紀に入ってからと見ることができる。

天王平遺跡では、1次調査で中世墓が検出されているが、古代墓は4次調査で初めて見つかった。出土した灰釉陶器から10世紀前半と判断される。遺跡内での集落と墓との関係をどのように捉え得るのか、検討しなければならぬ課題である。多度町内の奈良・平安時代の墓は、これまでに3カ所で見つかっている。まず、天王平遺跡に隣接する西天王平

遺跡からは、須恵器横瓶が出土しており古代墓であったとされる(土葬か火葬か不明)。西谷通古墓からは、須恵器の蓋付短頸壺が出土しており、火葬骨を納めた蔵骨器であろう。そして、八壺谷古墓は古墳の墳丘部分から、蔵骨器が出土している。

### 第2節 遺物について

#### (1) 移動式カマドについて

4次調査では、移動式カマドが2点出土している。三重県内における移動式カマドについては、上村安生氏が論考の中で触れられている<sup>①</sup>だけで他に論じられている例はない。

これまでのところ、移動式カマドは11箇所<sup>②</sup>の遺跡で出土している(表9)。この数字が全体として多いか少ないかは分からないが、斎宮で多く出土していることは指摘できる。斎宮の特異性と移動式カマドの特殊性<sup>③</sup>を考えれば、斎宮で出土量が多いことも頷ける結果であろう。特に注目すべきは、円形・方形周溝遺構(SX)の二ヶ所で出土していることである。この遺構は、これまでに17箇所<sup>④</sup>で検出されており、墳墓の可能性も示されているが未だ性格が定まっていない<sup>⑤</sup>。移動式カマドが出土している意味を考えれば、そこで祭祀を行っていたと解する事も許されるのではないだろうか<sup>⑥</sup>。

次に注目されるのが、志摩式製塩土器との関わりである。4次調査では2点の志摩式製塩土器が出土している。移動式カマドが出土している遺跡の中には、天王平遺跡以外にも志摩式製塩土器が出土しているところがあり、中には同一遺構から出土している事例も見られる。これは、志摩式製塩土器と塩の用途を考える上でも重要と考えられる。志摩式製塩土器については、堅塩を作るためのものであるとする見解が一般的である<sup>⑦</sup>。土器に詰められたまま、流通し各地で出土する。そして、堅塩は祭祀などに用いられた。製塩土器と移動式カマドとの関係については、森泰通氏が指摘されており<sup>⑧</sup>、同じ祭祀の場に移動式カマドと製塩土器(に入った塩)が使用されていたとされ、三重県内での事例も同じことが言えるのではないだろうか。

#### (2) 濃尾型甕について

東海地方では、S字状口縁台付甕から系譜を引く、

宇田型甕が5世紀にみられ、6世紀に入ると口縁端部が三角形になる伊勢型甕と呼ばれる甕が出現し8世紀まで隆盛する。今回の報告でも、その変遷をみることができ、6次調査ではS字状口縁台付甕・宇田型甕・伊勢型甕が出土し、1～4次では伊勢型甕が主に出土している。そして、8世紀後半になると地域ごと異なる土師器甕がみられるようになり、濃尾平野では濃尾型、三河地域では三河型が登場するとされる<sup>⑦</sup>。伊勢では前代と同じく伊勢型の甕が継続して出土する。

4次調査では、その大半が伊勢型の甕であるが、少量の濃尾型甕が含まれる(図19—54・62)。多度町内では、天王平遺跡のほかに柚井遺跡と南小山廃寺でも出土している。多度以外では、員弁町の段遺跡<sup>⑧</sup>と桑名市の中縄遺跡<sup>⑨</sup>でも出土しているが、伊勢側での報告例は少ないため、実態は不明と言わねばならない。双方向の物の流れを考えれば、両者が混在する地帯が存在するのは当然であり、愛知県側で濃尾型が出現した後にも伊勢型が見られる<sup>⑩</sup>。今後、調査が進めば、三重県側での濃尾型の分布範囲も広がるであろう。

(石神教親)

注

- ①上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』1996年
- ②移動式カマドの用途については、単なる煮炊き用ではなく、祭祀の一要素として、祭祀の場に持ち込まれ使用されたと考えている。
- ③大川勝宏・森川幸雄「三重県内の奈良・平安時代の墓制」『東日本日本における奈良平安時代の墓制』東日本埋蔵文化財研究会 1996年
- ④これらの遺構から、須恵器の長頸壺が比較的多く出土するのは、祭祀が行われていたことを示すものであろう。

上村氏・水橋公恵氏から、遺構の性格について古墳の周溝である可能性があることをご教授いただいた。その場合でも、古墳の墓前祭祀に移動式カマドが使われていたという事例もある。

森泰通「移動式カマドについての覚え書き—豊

田市江古山遺跡出土事例をもとに—」『三河考古』第10号 1997年

- ①森泰通「東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐって—」『第9回塩の会シンポジウム製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』1997年
- ⑥森泰通 注4文献に同じ。  
森氏からは、移動式カマド・製塩土器について示唆に富む種々のご教授をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。
- ①城ヶ谷和弘「東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」・永井宏幸「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』1996年
- ⑧蔭山誠一『段遺跡発掘調査報告』員弁町教育委員会 1995年  
遺物を実見していないが、「口縁端部をほぼ水平に外反するもの」とされ、内面口縁部にヨコハケ、外面体部にタテハケ調整が施されており、実測図から判断した。
- ⑨資料を実見するにあたり、斉藤理・平野亜紀両氏に便宜をはかっていただいた。記して感謝申し上げます
- ⑩注7に同じ

[移動式カマド参考文献]

- ①注1文献
- ②三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1979 史跡斎宮跡—発掘調査概報—』1980年
- ③三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1980 史跡斎宮跡—発掘調査概報—』1981年
- ④三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1981 史跡斎宮跡—発掘調査概報—』1982年
- ⑤三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1982 史跡斎宮跡—発掘調査概報—』1983年
- ⑥三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1983 史跡斎宮跡—発掘調査概報—』1984年
- ⑦三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1984 史跡斎宮跡—発掘調査概報—』1985年
- ⑧三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報1985 史跡斎宮跡—発掘調査概報—』1986年

- ⑨三重県斎富跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報 1986 史跡斎宮跡一発掘調査概報一』1987 年
- ⑩三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報 1987 史跡斎富跡一発掘調査概報一』1988 年
- ⑪三重県斎宮跡調査事務所『三重県斎宮跡調査事務所年報 1988 史跡斎宮跡一発掘調査概報一』1989 年
- ⑫斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成元年度発掘調査概報一』1990 年
- ⑬斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成 2 年度発掘調査概報一』1991 年
- ⑭斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成 3 年度発掘調査概報一』1992 年
- ⑮斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成 4 年度発掘調査概報一』1993 年
- ⑯斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成 5 年度発掘調査概報一』1994 年
- ⑰斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成 6 年度発掘調査概報一』1995 年
- ⑱斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成 7 年度発掘調査概報一』1996 年
- ⑲斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡一平成 10 年度発掘調査概報一』2000 年
- ⑳三重県埋蔵文化財センター『六大 A 遺跡発掘調査報告』2002 年
- ㉑三重県埋蔵文化財センター『嶋拔一第一次調査一』1998 年
- ㉒三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大垣内遺跡(3・4 次)発掘調査報告書』2000 年
- ㉓三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡』2000 年
- ㉔上野市教育委員会『堂垣内・大多田遺跡発掘調査報告』1988 年
- ㉕名張市教育委員会『鴻ノ巣遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群』1991 年
- ㉖三重県埋蔵文化財センター『堀田第 3 ～ 5 次調査』2002 年
- ㉗三重県埋蔵文化財センター『中出向遺跡(第 2 次)発掘調査報告喜一函版編一』1999 年
- ㉘三重県教育委員会『南勢バイパス発掘調査報告書』1973 年

遺 跡 名	遺跡所在地	遺 構	製塩土器	備 考	文献
天王平遺跡第4次	多度町	SB01・包含層	○	2点	
斎宮跡第6-5次	明和町	SD79			①
” 第27次	”	SK1225			②
” 第32次	”	SX1699			③
” 第33次	”	SK1820			③
” 第36次	”				④
” 第42次	”	SK2618	◎		⑤
” 第44次	”	SK1415		ミニチュア	⑤
” 第45次	”	SX2735			⑤
” 第51次	”	SB3113			⑥
” 第57次	”	SK3720	◎		⑦
” 第61次	”	SE4050			⑧
” 第61次	”	SK4053	◎		⑧
” 第62次	”	SK2358			⑧
” 第63次	”	SE4250	◎		⑧
” 第66次	”	SK4372			⑨
” 第66次	”				⑨
” 第75次	”	SK5072			⑩
” 第78次	”	SD5266			⑪
” 第80次	”	SK5391			⑪
” 第83次	”	SE5850	◎		⑫
” 第86次	”	SK6005			⑬
” 第86次	”	SK6015			⑬
” 第86次	”	SK6030			⑬
” 第86次	”	SK6045			⑬
” 第86次	”	SK6070			⑬
” 第86次	”	SK6071	◎	ミニチュア	⑬
” 第88次	”	SK2798	◎		⑬
” 第90次	”	SE6410			⑭
” 第97-2次	”	SK6704			⑮
” 第104次	”	SK7060	◎		⑯
” 第107次	”	SK7220			⑰
” 第108次	”	SK7250	◎		⑰
” 第109次	”	SK7432		ミニチュア	⑱
” 第124次	”	SK6792	◎		⑲
” 第124次	”	SK8083	◎		⑲
” 第124次	”	SK8084			⑲
” 第124次	”	SK8085			⑲
” 第124次	”	SK8088			⑲
” 第124次	”	SK8094			⑲
六大A遺跡	津市	SD01	○	3点	㉑
嶋拔遺跡 1 次	”	SH49	◎	2点	㉑
高茶屋大垣内遺跡	”	SK141・S209・SH242		3点	㉒
堀町遺跡	松阪市	SD4	◎		㉓
堂垣内遺跡	上野市	SB10			㉔
鴻ノ巣遺跡	名張市	SH90・91周辺/ SK167周辺		2点	㉕
堀田遺跡第3～5次	嬉野町	SD8		2点	㉖
中出向遺跡	青山町	包含層	○		㉗
高向A遺跡	御菌村	SB101			㉘

表8 三重県内移動式カマド出土遺跡一覧表

※○は製塩土器が同遺構からの出土、◎は同一遺構からの出土を示す。  
ミニチュアとはミニチュア土製品のカマドである。



# 写真図版



SH01



SH02



SH05



SB01



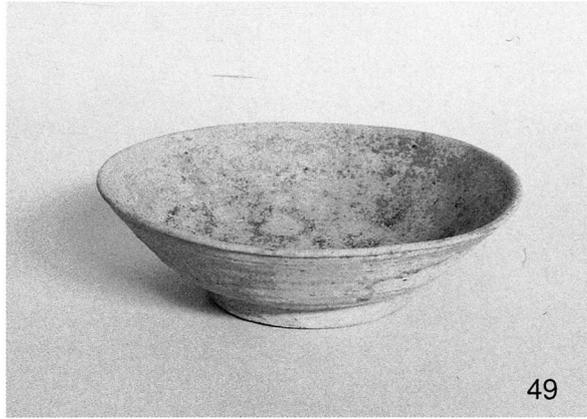
SH02遺物出土状況



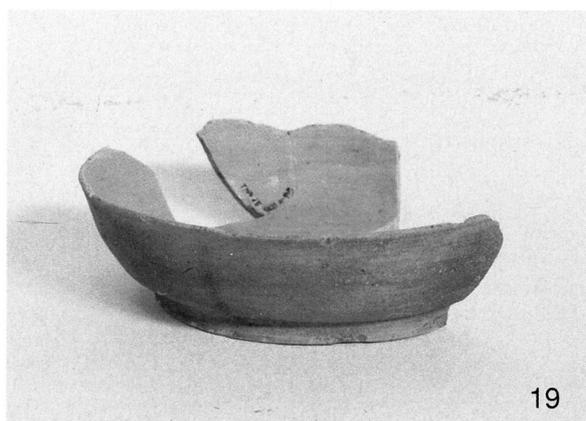
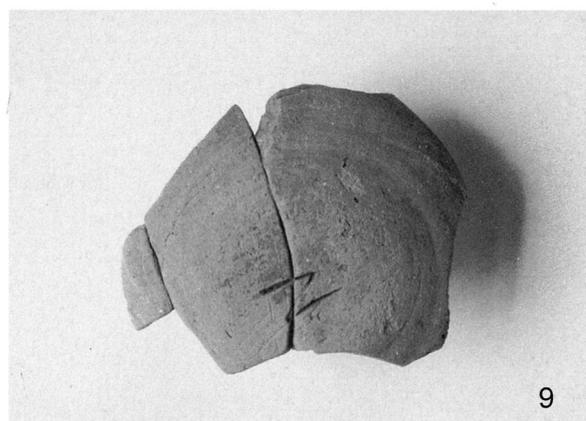
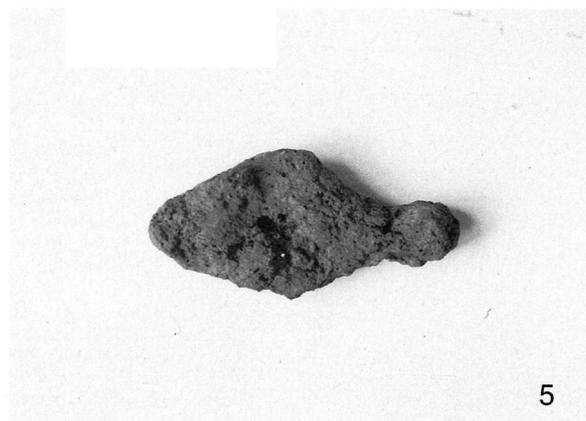
SH05遺物出土状況



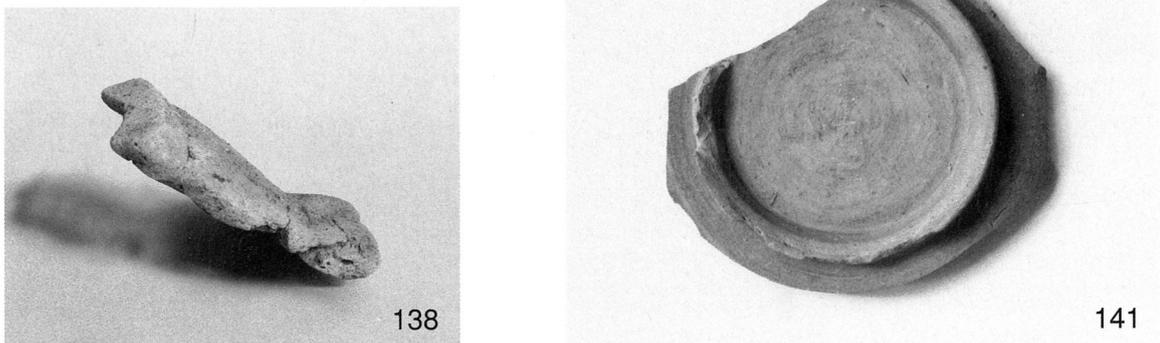
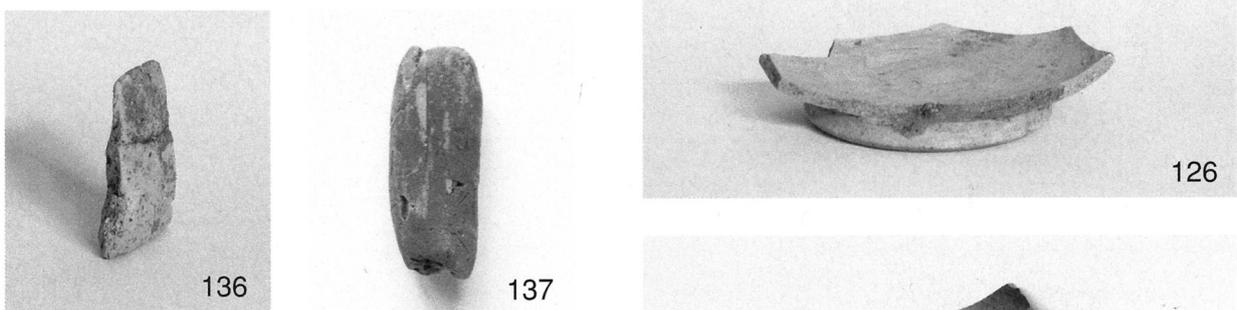
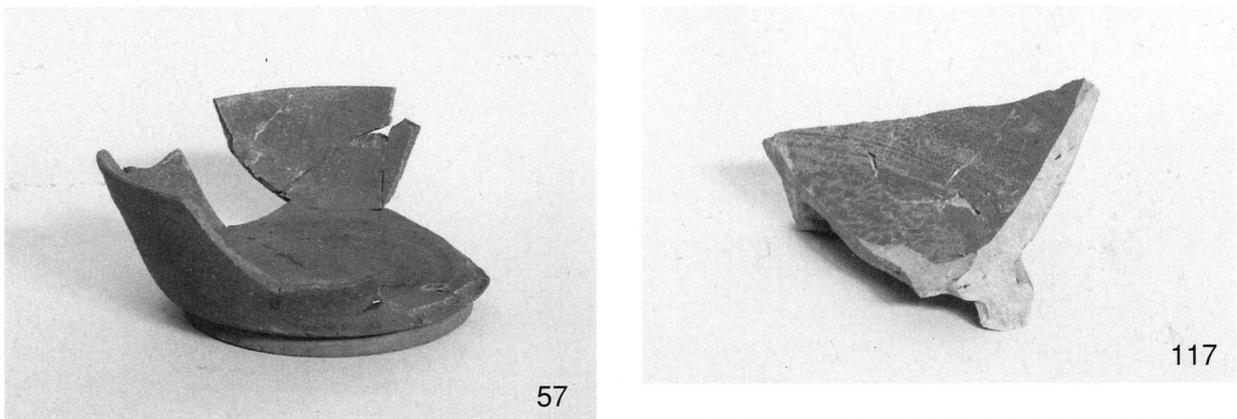
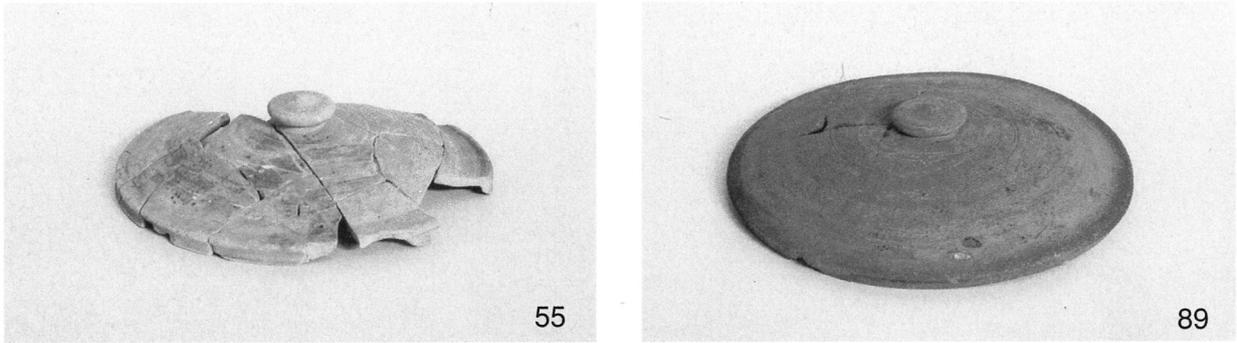
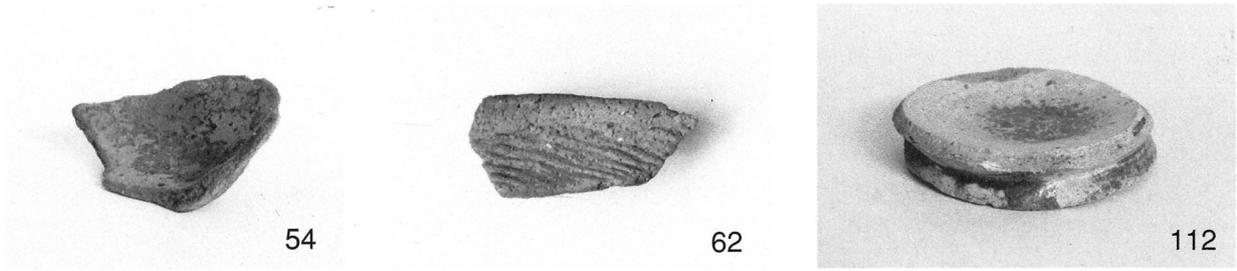
SX01遺物出土状況



SX01出土遺物



4次調査出土遺物(1)





5次調査区全景



6次調査区近景(南から)



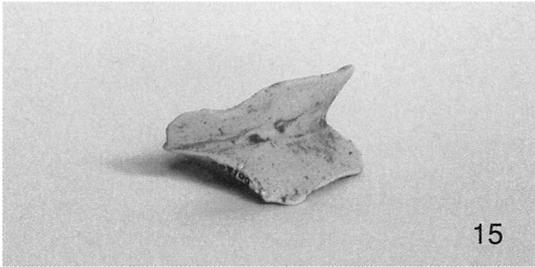
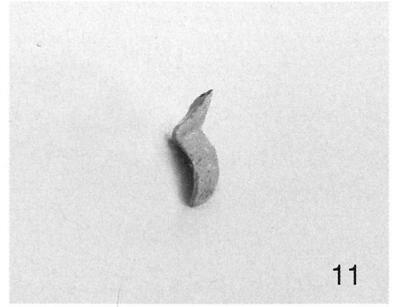
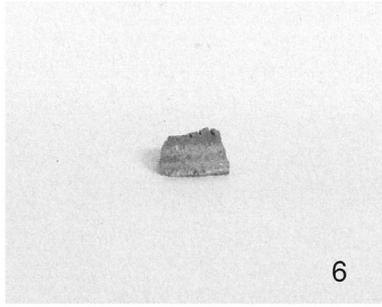
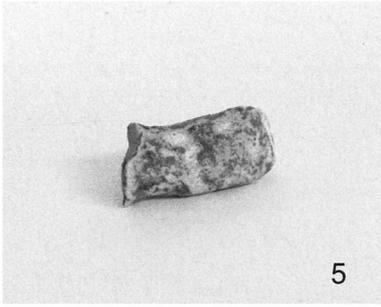
6次調査東トレンチ(北から)



6次調査西トレンチ(北から)



SK02内高杯出土状況



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	てんのうびらいせきはつくつちようさほうこくしょ									
書名	天王平遺跡発掘調査報告書									
副題	— 第4・5・6次調査 —									
シリーズ番号	多度町埋蔵文化財調査報告6									
編集者	石神教親・松田繁									
編集機関	多度町教育委員会									
所在地	〒511-0198 三重県桑名郡多度町多度1丁目1番地1									
発行年月日	2003（平成15）年3月									
遺跡名	所在地	遺跡番号		次数	調査期間	単位	北緯	東経	調査面積	調査原因
		県	町							
てんのうびらいせき 天王平遺跡	みえけんくわなぐんたどちよう 三重県桑名郡多度町 おおあざおやまあざてんのうびら 大字小山字天王平	150	57	第4次	1997. 6. 7 ～ 1997. 10. 15	度 分 秒	35 07 42	136 38 35	1024.5㎡	町道小山・多度駅線新設工事
				第5次	2000. 3. 22 ～ 2000. 3. 29	度 分 秒	35 07 42	136 38 34	56.9㎡	町道小山線改良工事
				第6次	2000. 11. 15 ～ 2000. 1. 4	度 分 秒	35 07 46	136 38 35	250㎡	町道小山多度駅新設工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項				
天王平遺跡	集落跡 ほか	古墳時代  奈良時代 ～ 平安時代	土壌・ピット  竪穴住居・掘立柱建物・土壌墓・溝・土壌・溝ピット	土師器・須恵器・有孔円盤  土師器・須恵器・灰釉陶器・製塩土器・移動式カマド・鉄製品・瓦		天王平遺跡では初めて、古代墓が確認された。 また、有孔円盤・移動式カマド・志摩式製塩土器といった祭祀に用いられた遺物が出土した。				

---

多度町埋蔵文化財調査報告 6

天王平遺跡発掘調査報告書—第 4・5・6 次調査—

編集・発行 多度町教育委員会  
〒 511-0198 三重県桑名郡多度町多度 1-1-1  
印 刷 オリエンタル印刷株式会社  
〒 510-0304 三重県安芸郡河芸町上野 2100  
発 行 日 平成 15 年 3 月 31 日

---



この印刷物は古紙配合率70%再生紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しています。